

仙台市文化財調査報告書第63集

史跡 陸奥国分寺跡

昭和58年度環境整備予備調査概報

南大門跡東脇築地跡

1984・3

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第63集

史跡 陸奥国分寺跡

昭和58年度環境整備予備調査概報

南大門跡東脇築地跡

1984・3

仙台市教育委員会

序 文

史跡陸奥国分寺跡の環境整備事業は、これまで主要伽藍の各造構の整備が終了し、市民一般に公開されて以来、散策、写生会等に親しまれ、活用されてまいりましたことは誠に喜ばしい限りであります。

陸奥国分寺跡は日本に数ある国分寺跡の中でも最北端に位置し、往時の古代国家の國づくりにおける東北支配にかけた威信と、古代東北の開拓の歴史を知る上に最も重要な史跡であります。約10万坪にも及ぶ広大な寺域は、中央から派遣された数百人、ある時には一千人もの名僧や学僧等が国の安泰を祈願したところでもあり、辺境の地に忽然と咲いた國の華でもあったのであります。

こうした遺跡の重要に鑑み、仙台市教育委員会は、近年來、積極的に土地の公有化を図り、遺跡の保護、保存、活用にむけて努力してまいったところであります。

今年度も文化庁、県の御助力により、民地2ヶ所の公有化を進めてまいりました。特に南大門跡東方に一定の面積が確保できることにより、南辺築地跡の造構の保存状況、築地の規模、構造等々の基本資料の収集を目的とした発掘調査を実施し、今後の整備事業を展望する好資料を得ました。

本報告書は、こうした調査の成果をまとめ、公開するものであります。本書が学識者はもとより、市民一般の目にとまり、文化財の保護ならびに啓蒙、活用、継承に役立てていただけるならば望外の喜びであります。

今後の文化財行政に格段の御支援を願って序といたします。

仙台市教育委員会

教育長 藤井 理

例　　言

1. 本書は、国庫補助事業（総額600万円）の環境整備事業に伴う、史跡陸奥国分寺の南大門跡東脇築地跡の発掘調査概報である。

2. 本概報は、調査の速報を目的とし、作成にあたり次のとおり分担した。

本文執筆 青沼一民……Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ 1、2、3・V

佐藤甲二……Ⅳ 3

遺構トレース 熊谷信一、横山広美

遺物実測 阿部多津子、庄子敦、白井美津子、斎藤美智子、横山広美、佐藤幸子、皆原恵美子、金沢君代、吉田康子

遺物トレース 横山広美、吉田康子、阿部多津子

遺構写真撮影 青沼一民、佐藤甲二、庄子敦

遺物写真撮影 佐藤甲二、菊池豊、熊谷信一

遺物拓影 金沢君代、阿部多津子、石川勝子

図面整理 熊谷信一、庄子敦

遺物復元 石川勝子

編集は、青沼・佐藤（甲）がこれにあたった。

3. 本報告の実測図・文中の方位は磁北で統一した。

4. 本報告書中の土色は、「新版標準土色帖」（小山・佐原：1970）を使用した。

5. 陸奥国分寺跡の遺構略号を次の通りとした。

SD 溝跡 SK 土壌 SF 築地跡

6. 遺物の分類略号は次の通りとした。

C 土師器（非クロ）	H その他の瓦
D 土師器（クロ使用）	J 陶磁器
E 須恵器	K 石器・石製品
F 丸 瓦	N 金属製品
G 平 瓦	P 土 製 品

本文目次

序文	
例言	
I. 調査の要項	1
II. 遺跡の位置と環境	3
III. 調査に至る経過	3
IV. 調査の概要	9
1. 基本層位	9
2. 発見遺構	10
3. 出土遺物	17
V. まとめ	39
付章	41

表目次

第1表 陸奥国分寺跡発掘調査略歴表	4	第3表 軒丸瓦観察表	27
第2表 出土文様瓦分類表	17	第4表 古銭観察表	36

図目次

第1図 周辺の遺跡	2	第14図 出土遺物軒平瓦(2)	21
第2図 調査地点位置図	5	第15図 出土遺物軒平瓦(3)	22
第3図 遺構配置図	7	第16図 出土遺物軒平瓦(4)	23
第4図 築地跡・溝跡平面図	9	第17図 出土遺物軒丸瓦(1)	24
第5図 築地跡断面図	10	第18図 出土遺物軒丸瓦(2)	25
第6図 築地崩落土上面遺物出土状況平面図	11	第19図 出土遺物軒丸瓦(3)	26
第7図 SK-3・5 土壙遺物出土状況平面図	13	第20図 出土遺物軒平瓦	27
第8図 SK-3・5 土壙断面図	14	第21図 出土遺物平瓦(1)	28
第9図 SD-2溝跡遺物出土状況平面図	15	第22図 出土遺物平瓦(2)	29
第10図 SK-4 土壙平面図・断面図	16	第23図 出土遺物丸瓦	30
第11図 出土遺物土師器・須恵器	18	第24図 出土遺物文字瓦	32
第12図 出土遺物土師器・陶磁器	19	第25図 出土遺物砥石・硯	35
第13図 出土遺物軒平瓦(1)	20	第26図 出土遺物古銭拓本	37

図 版 目 次

図版1 調査前全景	43	図版20 旧トレンチ	49
図版2 調査区全景	43	図版21 SK-3・5 完掘全景	49
図版3 築地跡全景	43	図版22 現地説明会風景	49
図版4 築地崩落土上面遺物出土状況	44	図版23 出土遺物 平瓦・丸瓦	50
図版5 SK-3土壤遺物出土状況	44	図版24 出土遺物 軒平瓦	51
図版6 第IV層上面遺物出土状況	44	図版25 出土遺物 軒平瓦	52
図版7 SK-5瓦溜め遺構遺物出土状況	45	図版26 出土遺物 軒平瓦	53
図版8 築地跡上面瓦出土状況	45	図版27 出土遺物 軒丸瓦	54
図版9 SK-5瓦溜め遺構遺物出土状況	45	図版28 出土遺物 軒丸瓦	55
図版10 築地崩落土上面遺物出土状況	46	図版29 出土遺物 軒丸瓦	56
図版11 SD-2溝跡遺物出土状況	46	図版30 出土遺物 文字瓦	57
図版12 SD-2溝跡遺物出土状況	46	図版31 出土遺物 道具瓦・平瓦、 近世瓦	58
図版13 SD-2溝跡遺物出土状況	46	図版32 出土遺物 陶磁器・石製品、 土製品・鉄洋	59
図版14 文字瓦出土状況	47		
図版15 均整唐草文軒平瓦出土状況	47		
図版16 偏行唐草文軒平瓦出土状況	47		
図版17 重弁蓮華文軒丸瓦出土状況	47		
図版18 SK-5瓦溜め遺構断面	48		
図版19 築地跡基底部断面	48		

I. 調査の要項

調査目的 南大門跡東脇築地跡一帯の環境整備に先行し、南脇築地跡の位置、範囲、及び、外郭南辺外の関連施設の調査を目的とする。

調査面積 約140m² (仙台市木ノ下三丁目74)

調査期間 昭和58年9月26日～11月15日

調査体制

調査上体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育委員会社会教育課文化財調査係

課長 永野 昌一

主幹 早坂 春一

文化財調査係 係長 佐藤 隆

文化財調査係 教諭 青沼 一民

主事 佐藤 甲二

文化財管理係 係長 大沢 隆夫

主事 山口 宏、岩澤 克輔

調査指導 伊東信雄（仙台市文化財保護委員、陸奥国分寺跡調査整備審議会委員、東北学院大学教授）

坪井清足（陸奥国分寺跡調査整備審議会委員、奈良國立文化財研究所所長）

高橋富雄（陸奥国分寺跡調査整備審議会委員、東北大学教授）

坂田 泉（陸奥国分寺跡調査整備審議会委員、東北大学助教授）

佐々木光雄（陸奥国分寺跡調査整備審議会委員、多賀城跡調査研究所所長）

発掘調査に際して、下記の方々、諸機関から適切な御教示をいただいた。記して感謝したい。

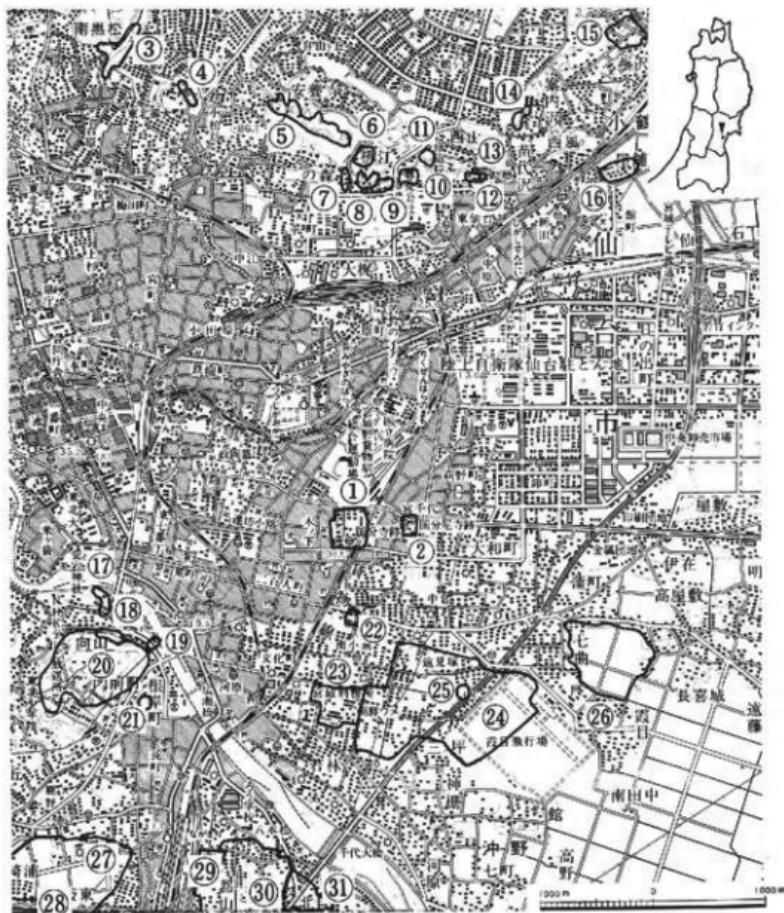
宮城県多賀城跡調査研究所 白鳥良一、高野芳宏、東北歴史資料館 岡村道雄、奈良國立文化財研究所 上原真人、名古屋大学教授 橋崎彰一、立正大学教授 坂詮秀一、前東北大学教授

芹沢長介、宮城県教育庁文化財保護課 藤沼邦彦、佐々木和博、手塚均、東北大学農学部助手

山田一郎、仙台育英学園高等学校教諭 渡辺泰伸、古川工業高等学校教諭 鶴田勝彦

発掘調査及び遺物整理にあたり次の方々の協力を得た。

熊谷信一、中野裕平、菊池豊、庄子敦、村上令子、浅見礼子、大山のり子、臼井美津子、阿部多津子、斎藤美智子、横山広美、佐藤幸子、菅原忠美子、金沢君代、吉田康子、石川勝子、



- | | | | | |
|---------------|------------|-------------|------------|-----------|
| No. 1. 陸奥国分寺跡 | 2. 陸奥国分尼寺跡 | 3. 五本松窯跡 | 4. 南光沢窯跡 | 5. 与共御沼窯跡 |
| 6. 桥江遺跡 | 7. 二ノ森遺跡 | 8. 神明社裏遺跡 | 9. 神明社窯跡 | 10. 土手前窯跡 |
| 11. 安養寺窯跡 | 12. 大應寺窯跡 | 13. 奈内古墳 | 14. 青応寺横穴群 | 15. 燕沢遺跡 |
| 16. 小袖城跡 | 17. 爰宕山横穴群 | 18. 大年寺山横穴群 | 19. 宗神寺横穴群 | 20. 茂ヶ崎城跡 |
| 21. 児塚古墳 | 22. 法領塚古墳 | 23. 若林城跡 | 24. 南小京遺跡 | 25. 遠見塚古墳 |
| 26. 仙台東郊条里跡 | 27. 富沢水田遺跡 | 28. 泉崎浦遺跡 | 29. 西台畠遺跡 | 30. 郡山遺跡 |
| 31. 北日城跡 | | | | |

第1図 周辺の遺跡

II. 遺跡の位置と環境

陸奥国分寺跡は、仙台市本ノ下三丁目に所在している。本遺跡は、仙台市の東南部、国鉄仙台駅から東方へ2.5kmの所である。地形を概観すると、名取川水系広瀬川流域に形成された自然堤防に位置している。西側は下町段丘、及び、海岸平野最奥部の境にあたり、付近は市の東方に広がる仙台平野の西北端に当たる広い平地である。東方約8kmには太平洋が望める。標高は、15~16m程度である。本遺跡周辺は、十数年前まで長く畠地として利用されていたが、近年は市街地となっている。

陸奥国分寺跡周辺の遺跡を観ると、まず南方1.0~1.5kmには、古墳時代中期の東北地方第3位の大きさを誇る前方後円墳の遠見塚古墳、後期の法領塚古墳等の大小の古墳群を成形している。また北方の丘陵地帯、台の原、小田原丘陵には、5世紀の須恵器を出土した遺跡として有名な大蓮寺窯跡、また瓦窯跡である安養寺下窯跡、安養寺中間窯跡、折江遺跡、蟹沢中窯跡、与兵衛沼窯跡、五本松窯跡、神明社窯跡等があり、瓦、須恵器だけでなく、丘陵上には土師器、鞘火口の散布もみられること等から他の生産も行なわれていたことが考えられる。現在も丘陵西端の堤町には、堤焼の窯があり、古から窯業に適した地として知られている。さらに陸奥国分寺跡から7km付近には、陸奥國府多賀城及び多賀城廃寺があり、陸奥国分寺跡、同尼寺跡等を含め、奈良時代~平安時代を通じ、これらの官衙、寺院等に瓦を供給した大窯跡地帯として聞らかれていたことが考えられる。

III. 調査に至る経過

陸奥国分寺跡は、白山神社付近一帯を中心とし、塔の礎石の存在等によって、早くから世に知られ、大正11年10月12日に史蹟名勝天然記念物法によって史跡に指定された。

史跡指定以来、昭和30年まで学術的調査は行なわれてなく、陸奥国分寺跡の性格、規模等の詳細が知られていなかった。

昭和30年に史跡指定地内で開発行為による現状変更を機に初めて、学術的調査が行なわれた。調査は昭和30~34年までにおよび、一連の調査のなかで果たした役割は大きく、調査によって、全国的にみても遺存状況の極めて良好な、東大寺式伽藍の存在が確認された。

陸奥国分寺は、当時の尺度で800尺(約242m)四方の寺地を区画したものと考えられ、寺地の南北中軸線上に南大門、中門、金堂、講堂、僧坊を配し、金堂と中門を廻廊で結び、金堂、講堂間の東西に鐘楼、経楼を、金堂の真東に七重塔を置き、塔にも廻廊をめぐらすという伽藍配置をとることが明らかになった。また外郭施設は築地、門、掘立柱列、溝などによって区画されていることが確認されている。このように七堂伽藍を兼ね備えた本格的な寺院で、国分寺

は、方二町をもつて標準的なものとされているが、陸奥国分寺は規模として、大きいものと思われる。

またその後、陸奥国分寺跡周辺は、宅地化の進展により、遺跡を保護する目的で、昭和43年度から土地の買収、公有化に着手しており、地下に埋没している遺構を地上復元するなどの一連の環境整備事業を昭和47年度より実施している。

第1表 陸奥国分寺跡発掘調査略歴

*個人住宅建築に係わる10m²未満の試掘調査を除く。

年 度	調 査 区 别	発 掘 調 査 地 区	調査面積
昭和30年度	学術調査(第一次)	金堂跡、迴廊東半、塔跡西辺、塔南瓦窓	
31	△ (第二次)	講堂跡、中門跡、迴廊西半、南大門跡、鐘楼跡、經樓跡 軒廊跡、僧坊跡の一部	
32	△ (第三次)	僧坊跡、准胝觀音堂付近遺跡、塔跡、塔廻廊跡	約 4,000m ²
33	△ (第四次)	塔跡、塔廻廊跡南辺、東門跡、僧坊西建物跡の一部	
34	△ (第五次)	僧坊西建物跡、僧坊東建物跡、西境界線上の掘立柱列跡、講堂跡根石、北門跡の推定地	
42	現状変更事前調査	東北部(外周溝)	約 120m ²
47	環境整備(第一次)	塔院廻廊跡	150m ²
48	△ (第二次)	塔院廻廊跡、僧坊跡、南辺築地跡	240m ²
49	△ (第三次)	中門跡、金堂跡、廻廊跡、僧坊跡	344m ²
50	現状変更事前調査	西南部(築地・中世掘立柱建物)	1,010m ²
53	△	南東部	112m ²
54	△	西南部、准胝觀音堂付近遺跡・東北部	1,180m ²
55	環境整備(第四次)	東門跡	約 400m ²
57	現状変更事前調査	西側寺域外縁	約 70m ²
58	環境整備(第五次)	南大門東築地跡	約 140m ²

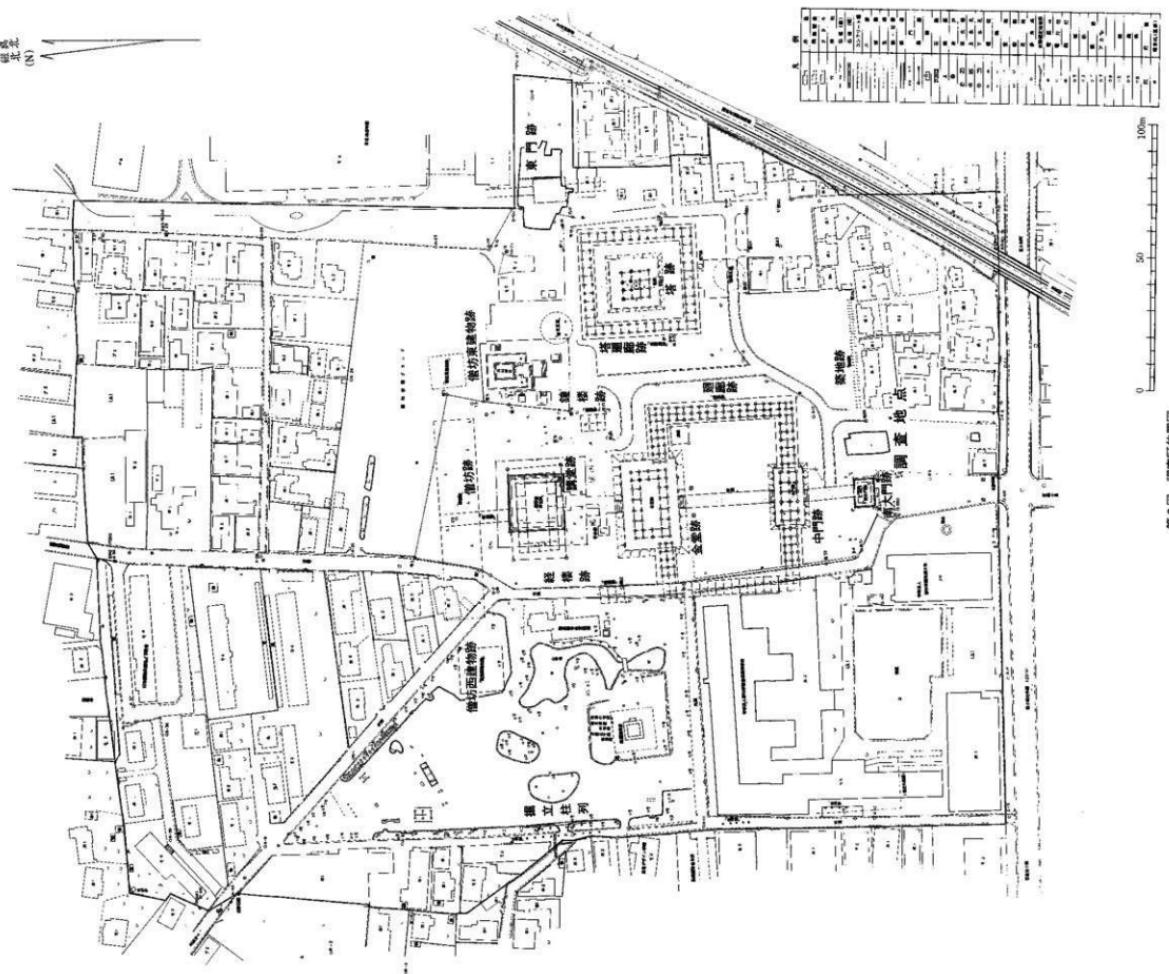
注1 「陸奥国分寺跡」陸奥国分寺跡発掘調査委員会編 1961

注2 史跡陸奥国分寺一昭和55年度環境整備予備調査報告—仙台市文化財調査報告書 第27集 1881. 3

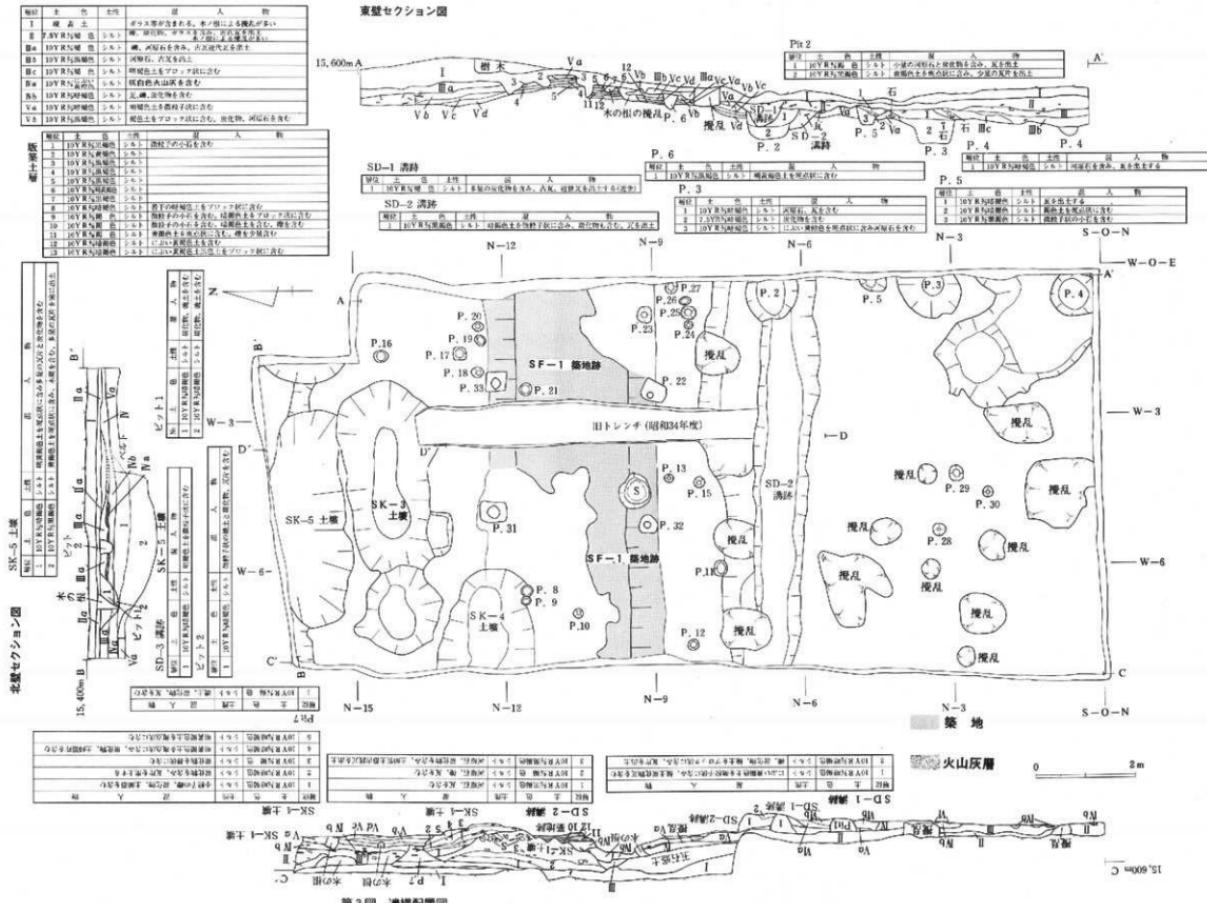
注3 仙台平野の遺跡群Ⅱ 仙台市文化財調査報告書 第47集 1983. 3

注4 史跡陸奥国分寺東築地跡発掘調査現地説明会資料 1983. 11. 5

環境整備を実施するにあたり、調査成果を復元設計の基礎資料にするため、その予備調査が行なわれ、昭和48年度には塔跡、昭和55年度には、東門跡及び、それに関係する遺構確認の調査を行なっている。本年度は、南大門跡東築地跡の確認とこれに関連する遺構確認の調査を行なった。



第2图 调查区位置图



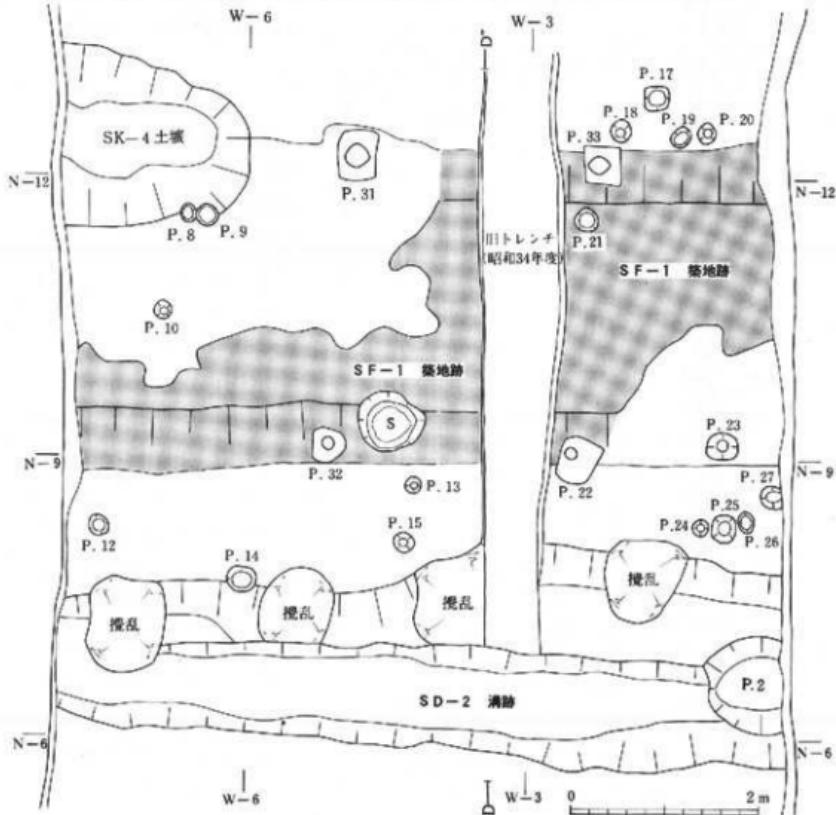
第3圖 遺構配置図

IV. 調査の概要

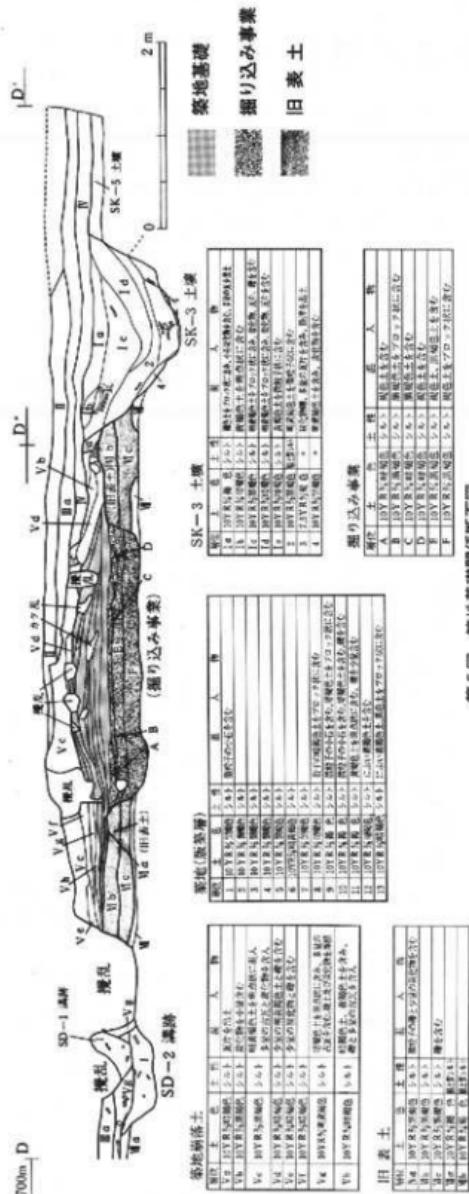
陸奥国分寺跡寺域の南方に位置する仁王門は、慶長12年(1607年)、伊達政宗によって建立された八脚門である。昭和31年の調査では、仁王門の位置に、陸奥国分寺跡南大門の存在が確認された。また南大門跡の東方には、土壘状の高まりが、陸奥国分寺に関連する施設と考えられていた。現仁王門の東方に僅かに高まりを有する部分に調査区を設定した。調査区は、東西幅8m、南北幅15m 程である。

1. 基本層位

陸奥国分寺跡の基本層序は、表土下30~40cmで整地層が検出され、主として3層に分けられる白色シルト、暗褐色土、褐色土からなる。整地層下は、締まった黒色土の旧表土が検出される。さらに細かく締った黄褐色粘土層が20~30cm検出され、その下層に厚い砂礫層がある。



第4図 築地跡・溝跡平面図



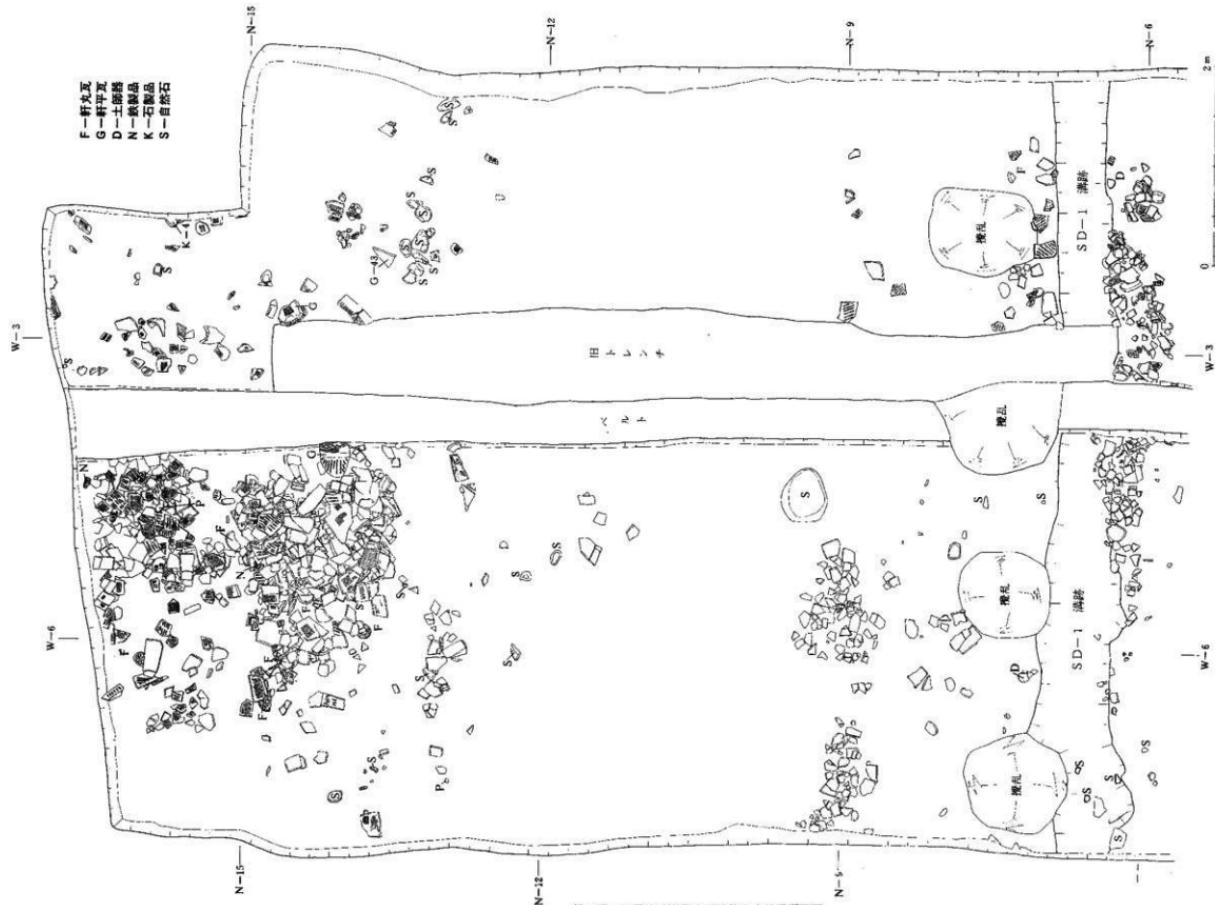
本調査区は、南大門跡から真東の所に設定し、現状は、築地跡と思われるところが土壌状に盛り上がっており、表土を排土すると中央部分で、築地跡が検出された。また調査区南半は、排土すると、黄褐色粘土層、一部砂礫層が検出され、旧表土が削平されている。調査区北半は、表土から厚さ60cm程で第Ⅳ層の旧表土が検出され遺存状況が良好である。また北壁断面のⅣ層上面では、厚さ、5cm程の灰白色火山灰層が堆積している。

2. 発見構造

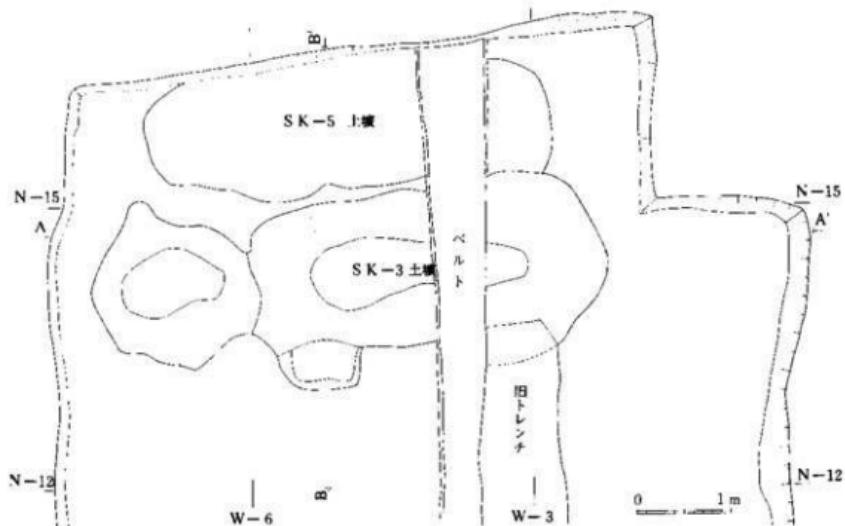
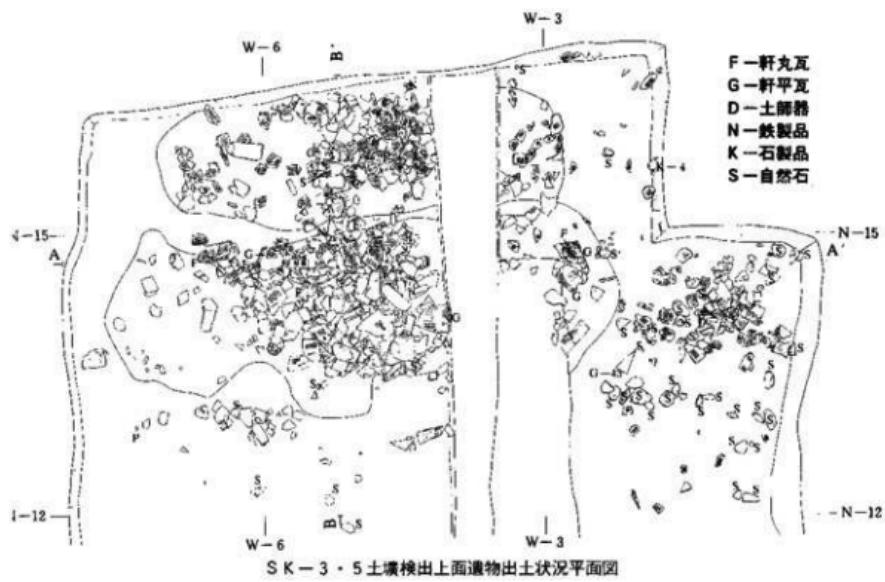
SF-1 築地跡

調査区ほぼ中央で東西方向に伸びる築地本体を検出した。調査区南半は、民有地内の埋設管工事及び基礎ブロック、またコンクリート塀の基礎等で旧表土まで削平を受けている。築地本体はすでに削平されているが、基礎の南北西側には、1m程の広がりで築地崩落土が堆積していた。築地の基礎の遺存状況が良好な所では、旧表土を南北に幅310cm程、深さ35~40cm程、逆台形状に掘り込んでから黄褐色土と黒褐色土を交互に水平に積み上げて版築している。築地本体上面は、ほぼ中央部の遺存状況が良好な所で高さ40cm程を計る。

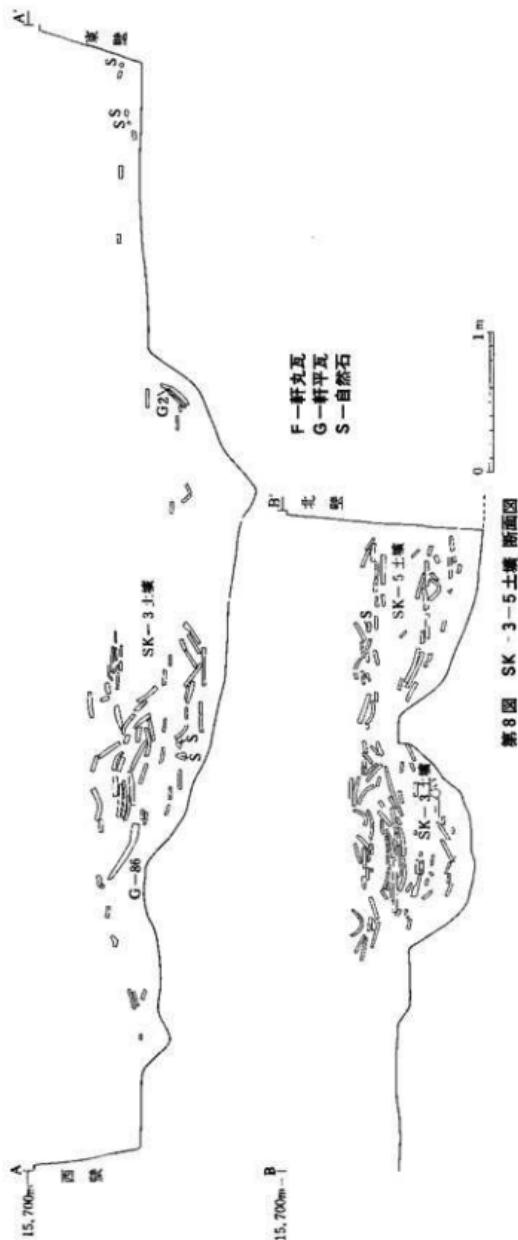
堆積状況は、基本的に黒褐色土。



第6図 V層崩地崩落上面遺物出土状況平面図

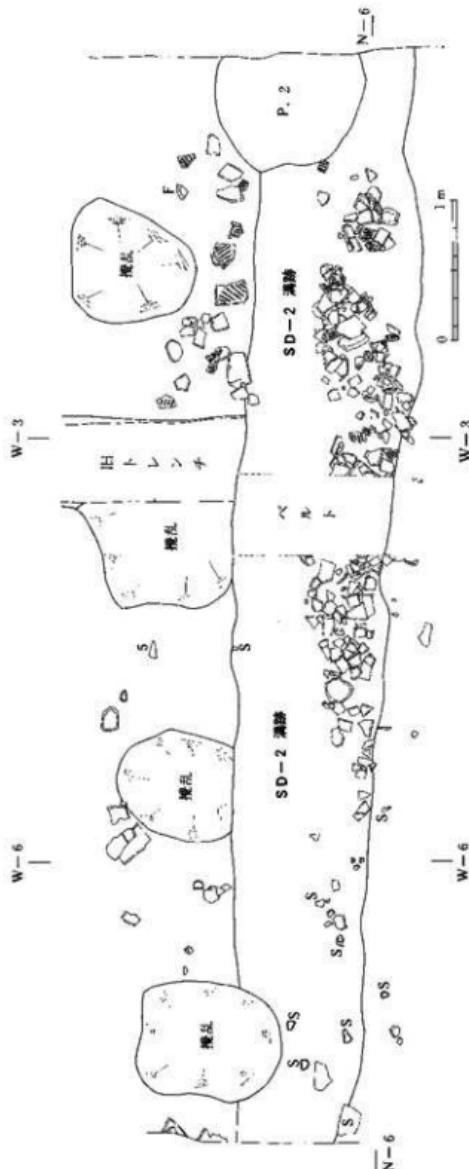


第7図 SK-3・5 土壌平面図



第8図 SK-3-5土壤断面図

黄褐色土を厚さ3~5cmで交互に積み上げて固くしめている。また上層面では暗褐色土の色に1cm前後の小石を含む材を版築している。築地基礎上面からは築地両端から築地に伴う状況でピットが10数個検出されたが、柱穴掘り方、間尺等から推察すると寄柱として断定しがたい。築地本体の南側には幅100cm前後の南側に緩るい傾斜をもつ「犬走り」が形成されている。築地北側は、木の根による搅乱、SK-3 土壤、SK-4 土壤等で削平が激しく遺存状況は悪い。築地の基礎事業を昭和55年の東門跡、昭和46年の南辺築地跡等の調査の掘り込み事業と比すれば、東門跡及び前回の南辺築地跡は、旧表土を浅い舟底形状に掘り込んでおり、今回の調査では、逆台形状を呈していることから、掘り込み事業の違いが認められる。さらに、築地基礎事業の土木工事の方法による差異とも考えられるが、さらに築地跡の調査の増加を待ちたい。



第9図 SD-2溝跡遺物出土状況平面図

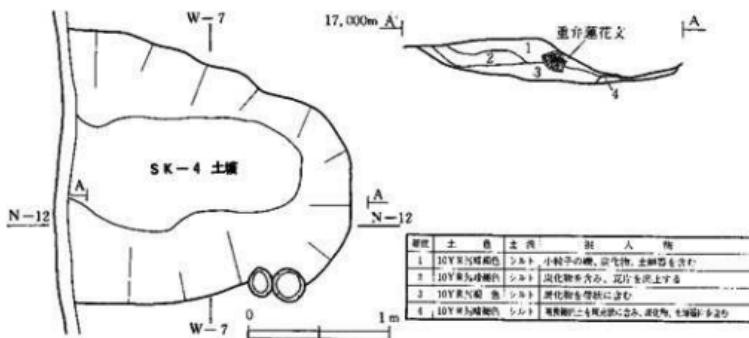
三

SD-1溝跡 調査区南半で検出された東西に伸びる上幅50~60cm、底幅30cm、深さ15~25cm程の断面U字形の溝跡である。溝跡の堆積土は褐色シルトで堆積土中から布目瓦と一緒に薬師堂に関係すると思われる近世瓦も出土している。

SD-2溝跡 調査区南半で検出され、築地跡の南側で平行して走る、東西に伸びる溝跡は、上幅1m前後、底面幅60~70cm、深さ4~20cm程で断面逆台形を呈している。築地本体南端から、溝跡中心まで、150cm前後を計り、築地本体中心から溝跡中心まで430cm前後を呈している。堆積土上層からは密な瓦の出土状況を示し、下層から少量の古瓦片（第9図）を出土している。堆積土は、黒褐色シルトで、一部分炭化物を含む。

十一

SK-1土壤 調査区北西部で検出され、西壁にかかる為全容は不明であるが、ほぼ円形で、直径 3.5 m、深さ 75 cm、断面逆台形を呈している。堆積土は大別して 2 層に分けられ、



第10図 SK-4 土壌平面図・断面図

褐色土、黒褐色土で、底面上から、直径20cm前後の河原石を多量に含み、古瓦、近世瓦等も多量に出土する。築地本体を掘り込んで削平している。

SK-2土壤 調査区南壁寄りで、不整梢円形状の落ち込みを検出したが、断面、平面プランを検討した結果、遺構と断定しえず、SK-2を欠番にした。

SK-3土壤 調査区北壁寄りで検出され、V層築地崩落土を掘り込んでいる。築地本体から1.5m北側で検出されている。平面形は不整長方形で長軸5.5m、短軸1.6m、深さは東側が深く、90cm、西側が20cmを計る。断面逆台形を呈している。堆積土は大別して4層に分けられる。瓦の出土状況を見ると堆積土上層面から山形文軒平瓦、宝相華文軒丸瓦、偏行唐草文軒平瓦、重弁蓮華文軒丸瓦、重弧文軒平瓦、細弁蓮華文軒丸瓦等の文様瓦を含む瓦片を多量に出土している。

SK-4土壤 調査区南壁寄りで検出された。SK-4土壤は、上部がSK-1土壤、ピットNo.7で切り込まれている為、遺構の確認面はV層築地崩落土層であるが、断面観察の結果、確実にⅢ層かⅣ層面の掘り込みと思われる。平面形は西壁にかかる為全体は不明であるが、不整梢円形を呈し、深さ20~25cm前後である。堆積土は大別して2層に分けられ、シルト褐色土、及び黒褐色土である。

SK-5土壤 調査区北壁寄りで検出されており、遺構確認面はV層である。北壁にかかる為全容は不明であるが、平面形は不整梢円形状で調査区外に拡がると思われる。確認される幅は4.3m程で、深さは85cm程であるが、調査区外に伸びてさらに深くなると思われる。V層築地崩落土層を掘り込んでおり遺構検出面及び、堆積土層面から古瓦を基底面までぎっしり積み重なって出土している。特徴ある瓦としては、重弁蓮華文軒丸瓦（第17・18図）、宝相華文軒丸瓦（第19図）、偏行唐草文軒平瓦（第13・20図）、さらに土師器坏、鉄洋等を出土している。

3. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、土師器、須恵器、瓦、陶磁器、石製品、金属製品古錢、土製品等である。その中で、瓦類が全遺物出土量の大半を占めており、遺物の総量は、整理用平箱で250箱にも及ぶ。特に瓦は、築地跡上面及び築地崩落土中より多量に出土している。

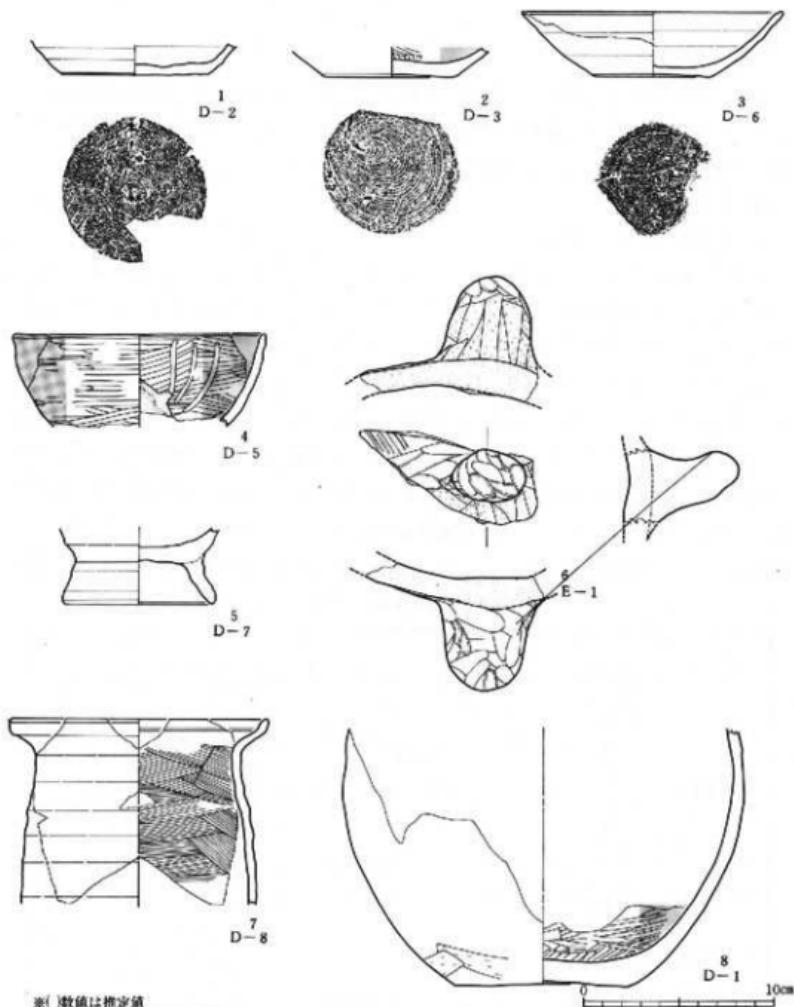
各種別ごとに記述する。

(1) 土師器 (第11図 図版31-9)

土師器はⅢ層、SD-1・2溝跡、SK-3・5土壤等から出土している。出土量は少なく、岡化したのが壺・甕等5点である。壺(第11図2)は、SK-5埋土から出土し、ロクロ調整され、内面は、ヘラミガキ、黒色処理が施されている。甕(第11図4)は、C区SD-1溝跡から出土し、ロクロ未使用で、内外面とも黒色処理され、また内面ヘラミガキが施されている。壺(第11図3)は、ピット-3埋土から出土し、内外面ともロクロ調整が施され、底部切り離しは、回転糸切りである。甕(第11図1)は、SK-3土壤から出土し内外面ともロクロ調整が施され、底部切り離しは、回転ヘラ切りのち手持ちヘラケズリである。底部内面には、漆が付着している。甕(第11図7)は、A区拡張Ⅲ層から出土し、頸部でくびれ、口縁部で外反し、内外面ともロクロ調整され、内面は、ヘラナデが施されている。甕(第11図8)はSK-3土壤

第2表 出土文様瓦分類表

軒 丸 瓦				軒 平 瓦			
種類	分類	点数	合計	種類	分類	点数	合計
重弁蓮華文	第I類	2	61	重弧文	第I類	5	
	II	1			II	0	7
	III	0			III	0	
	IV	9			不明	2	
	V	2		偏行唐草文	第I類	35	
	VI	1			II	0	
	その他				III	3	
宝相華文	不明	46			IV	1	40
	第I類	2			V	0	
	II	0			不明	1	
	III	1		均輪唐草文	第I類	2	
	IV	2			II	5	
	V	0			III	0	
細弁蓮華文	第I類	1			IV	0	10
	II	1			不明	3	
歯車文			1	連球文	第I類	1	
			1		II	5	
桜花様文			1		不明	2	8
総計				山形文		17	17
70点				総計		82点	



(数値は推定値)

番号	出土地點	種	目	D	形	地質結構	層化	外			内			直 径 cm	横 幅 cm	残 存 状 況	
								柱 高 度	外 周 長	壁 厚	内 周 長	深 度	底 面				
1	D-1	土師器	H	BK	SK-3	海綿土	ロクロ調整	ロクロ調整	10.5	2.5	10.5	2.5	2.5	ロクロ調整	7.8	口縁部から 底	
2	D-2	土師器	H	AK	SK-3	海綿土	—	ロクロ調整	10.5	2.5	10.5	2.5	2.5	不規	6.2	縫合下部から 底	
3	D-3	土師器	H	CK	P-3	海綿土	ロクロ調整	ロクロ調整	10.5	2.5	10.5	2.5	2.5	ロクロ調整	6.0	15.6	3.4
4	D-4	土師器	H	CK	SD-1	海綿土	ココナツ	—	10.5	2.5	10.5	2.5	2.5	ナ	13.2	口縁部から 底	
5	D-5	土師器	H	CK	SD-1	海綿土	—	ロクロ調整	—	—	—	—	—	ナ	13.2	口縁部から 底	
6	D-6	土師器	H	CK	SD-1	海綿土	—	—	—	—	—	—	—	ナ	13.2	口縁部から 底	
7	D-7	土師器	H	CK	SD-1	海綿土	—	ロクロ調整	—	—	—	—	—	ナ	13.2	口縁部から 底	
8	D-8	土師器	H	CK	SD-1	海綿土	—	—	—	—	—	—	—	ナ	13.2	口縁部から 底	
D-1	土師器	廣	A	K	深	土	底	ロクロ調整	ロクロ調整	—	—	—	—	—	—	—	—
D-2	土師器	廣	A	K	深	土	底	ロクロ調整	ロクロ調整	—	—	—	—	—	—	—	—
D-3	土師器	廣	A	K	深	土	底	ロクロ調整	ロクロ調整	—	—	—	—	—	—	—	—
D-4	土師器	廣	A	K	深	土	底	ロクロ調整	ロクロ調整	—	—	—	—	—	—	—	—
D-5	土師器	廣	A	K	深	土	底	ロクロ調整	ロクロ調整	—	—	—	—	—	—	—	—
D-6	土師器	廣	A	K	深	土	底	ロクロ調整	ロクロ調整	—	—	—	—	—	—	—	—
D-7	土師器	廣	A	K	深	土	底	ロクロ調整	ロクロ調整	—	—	—	—	—	—	—	—
D-8	土師器	廣	A	K	深	土	底	ロクロ調整	ロクロ調整	—	—	—	—	—	—	—	—

第111図 出土遺物 土師器・須恵器

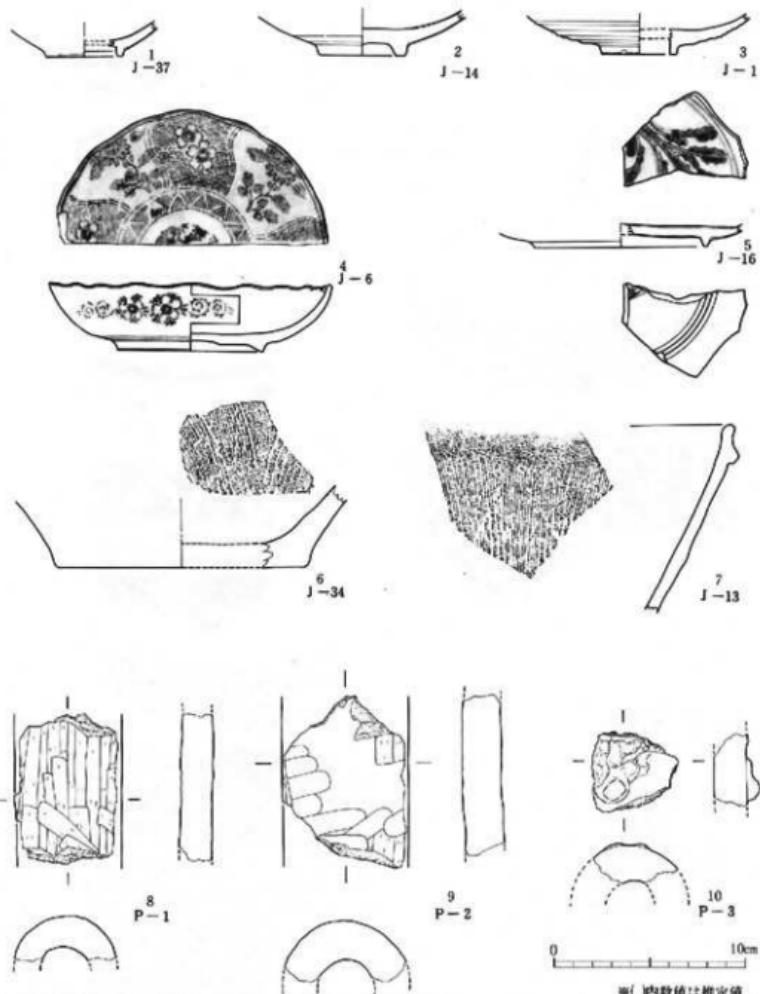
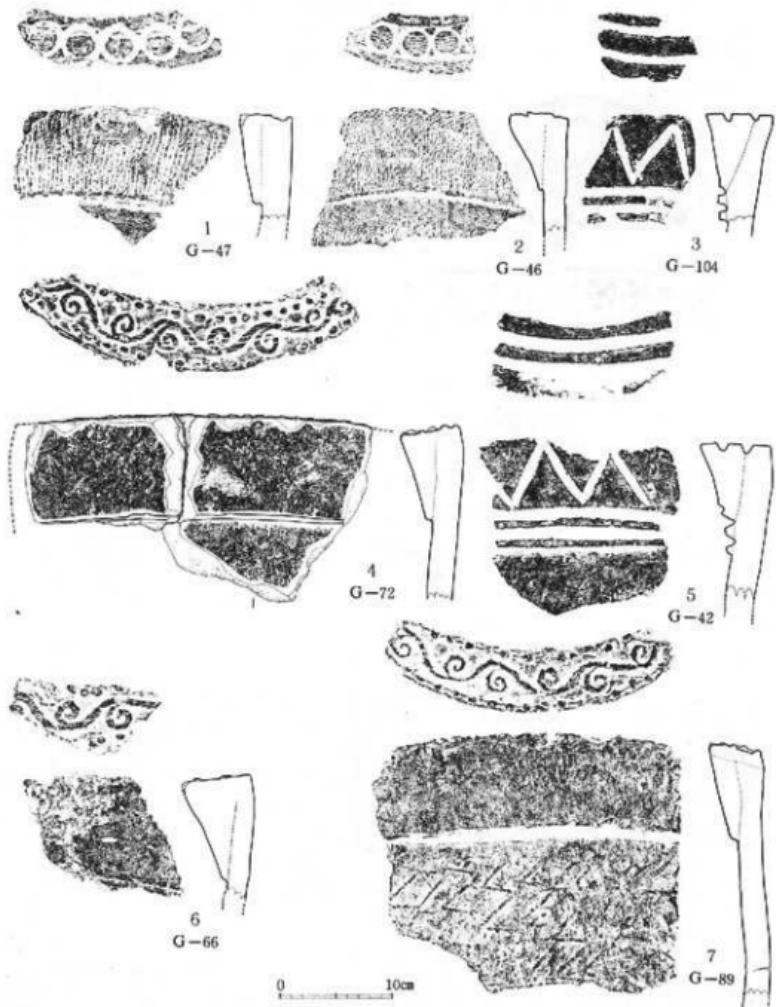


図12出土遺物 土師器・陶磁器

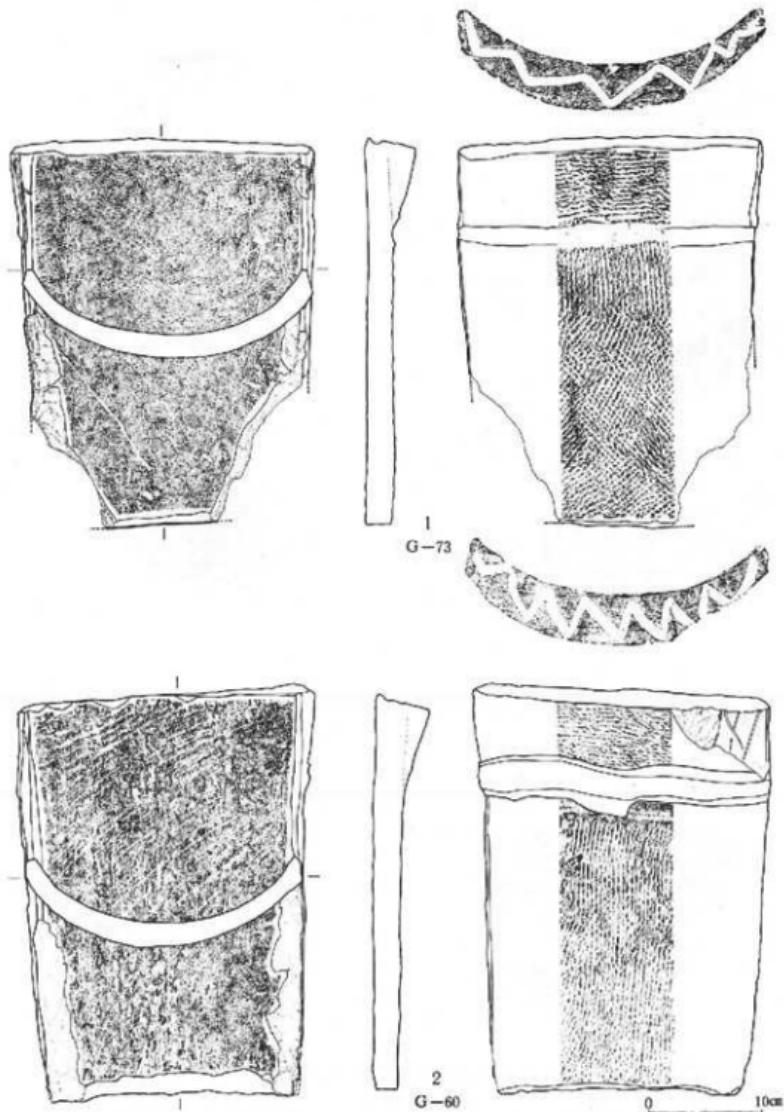
番号	登錄番号	地 区	層 位	器形	外 表	内 面	法 幅 横径(cm)	法 幅 口徑(cm)	高 度 高さ(cm)	著 者	写真番号
1	J-32	C 地 区	Ⅲ 層	瓶	タマゴ型しらべの陶瓶貫入あり	鉄物 貫入あり	4.8			足込み部分は鉄物されてない	—
2	J-34	A 地 区	Ⅲ 層	瓶	タマゴ型しらべの陶瓶	鉄物	4.3			足込み部分は鉄物されてない	32-2
3	J-1	未 無	未 無	瓶	鉄物 貫入	鉄物 貫入あり	3.9			—	32-3
4	J-6	B 地 レンガ	壁	筒状	透け板・透け穴(内2本強調)	透け板・板・青磁透光 斑様	7.6	14.4	3.5	—	32-4
5	J-18	B 地 レンガ	壁	筒状	透け板	透け板 文 開心円2本強調	9.0			—	32-1
6	J-34	C(E.S.K-2)	埴生土	壺	透け板 + タマゴ型しらべの底	透け板 + 本手底強調(透け穴用意)	13.0			—	—
7	J-13	未 無	未 無	瓶	鉄物 貫入	鉄物 貫入				井 口	31-10
8	P-1	D 地 区	自 倒	瓶	輪錐(透光)	透光輪錐	外径6.42	孔径2.60		外側灰半透明	32-7
9	P-2	D 地 区	自 倒	瓶	輪錐(透光) → 鉄柱ナゲ	透光輪錐	外径6.40	孔径2.0		—	—
10	P-3	SD - 3	埴生土	不 明			丸径3.5			内側灰半透明 外側灰平行筋	—

第12図 出土遺物 土師器・陶磁器



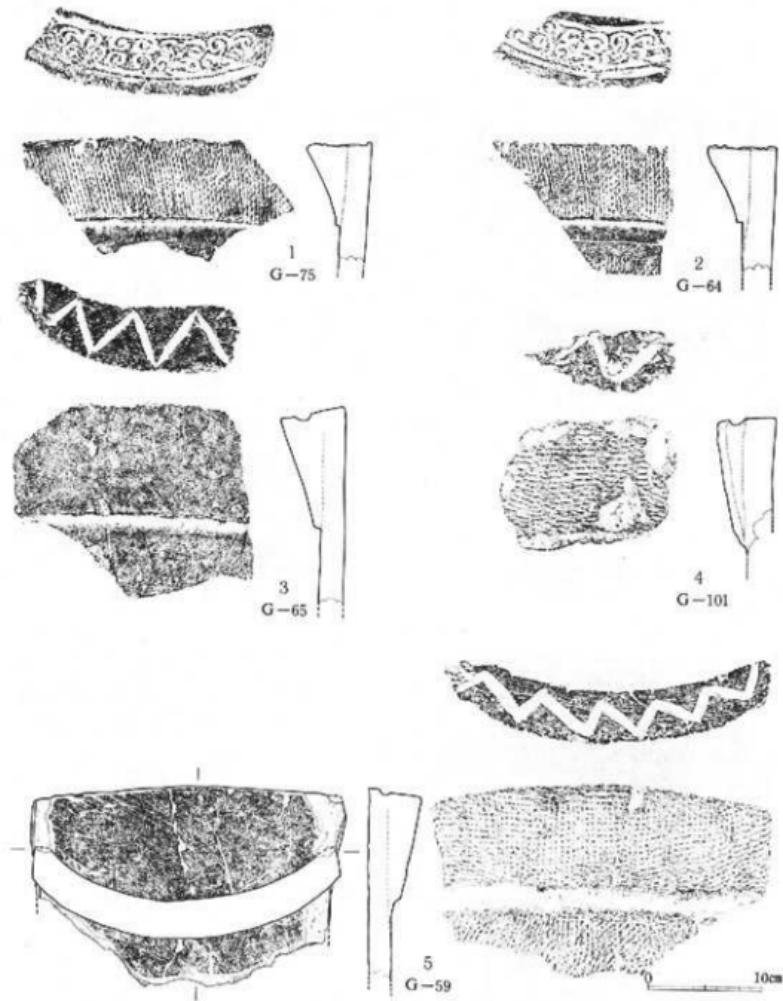
番号	登録番号	群 形	地区 遺構	層位	凸 面	凹 面	分類	写真図版
1	G-47	連 珠 文	C区	SK-2	堆 土	規則き目	右 目	I類 26-3
2	G-46	連 珠 文	C区	SD-2	堆 土	規則き目	右 目	II類 25-6
3	G-104	重 乳 文	A区	SK-3	堆 土	輪廓曲文、平行沈線	右 目	I類 24-6
4	G-72	偏行唐草文	C-D-E-F-SD-2	堆 土	規則き目	複数に朱	右目、顎部指ナデ	III類 —
5	G-42	重 乳 文	B区	IV層	輪廓曲文、平行沈線	右目	スリケシ	I類 24-5
6	G-66	偏行唐草文	B区	Ⅲ層	規則き目、スリケシ「朱付書」	右目	ナデ	III類 24-1
7	G-89	偏行唐草文	A区	SK-3	堆 土	格子印き目	右 目	I類 —

第13図 出土遺物 軒平瓦(1)

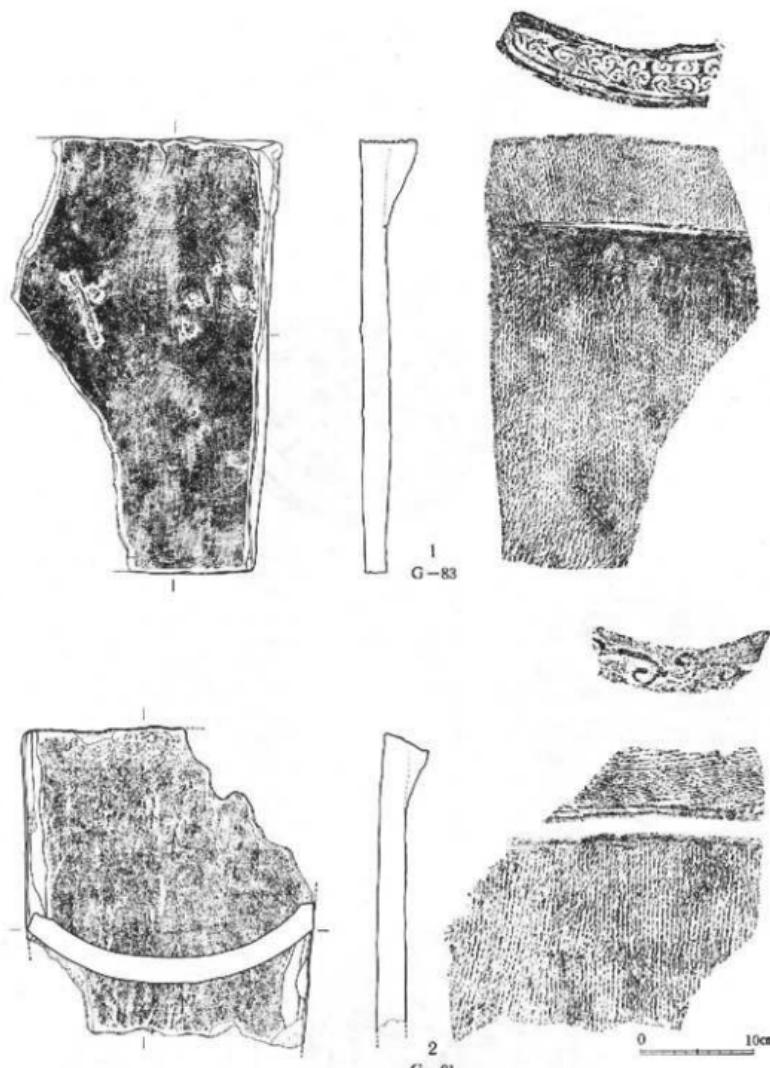


第14図 出土遺物 軒平瓦(2)

番号	登録番号	器 形	地 区	造	層位	凸 面	凹 面	分類	写真図版
1	G-73	山形文	B区	SK-3	埴 土	圓印き目	糸切り痕 布目	—	26-1
2	G-60	山形文	A区	SK-3	埴 土	圓印き目	糸切り痕 布目	—	26-4

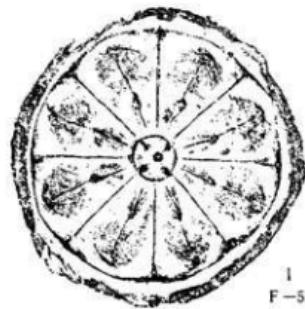


第15図 出土遺物 軒平瓦(3)

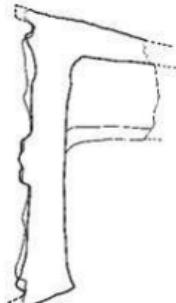


第16図 出土遺物 軒平瓦(4)

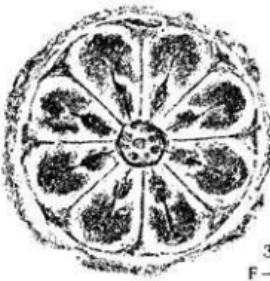
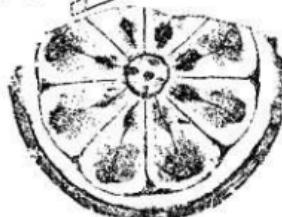
番号	登録番号	器 形	出土遺構	層位	凸 面	凹 面	分類	写真図版
1	G-83	均窓唐草文	A区 SK-5	堆土	瓶窓叩き目	布目窓、スリケシ	II類	26-5
2	G-81	蘭行遊草文	SK-5	堆土	瓶叩き目	布目窓スリケシ	IV類	24-4



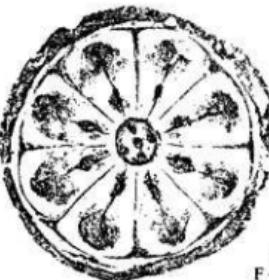
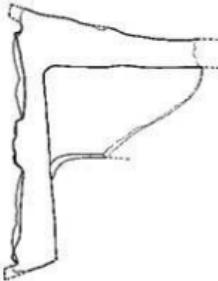
1
F-51



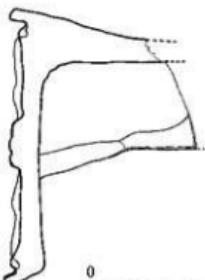
2
F-52



3
F-3

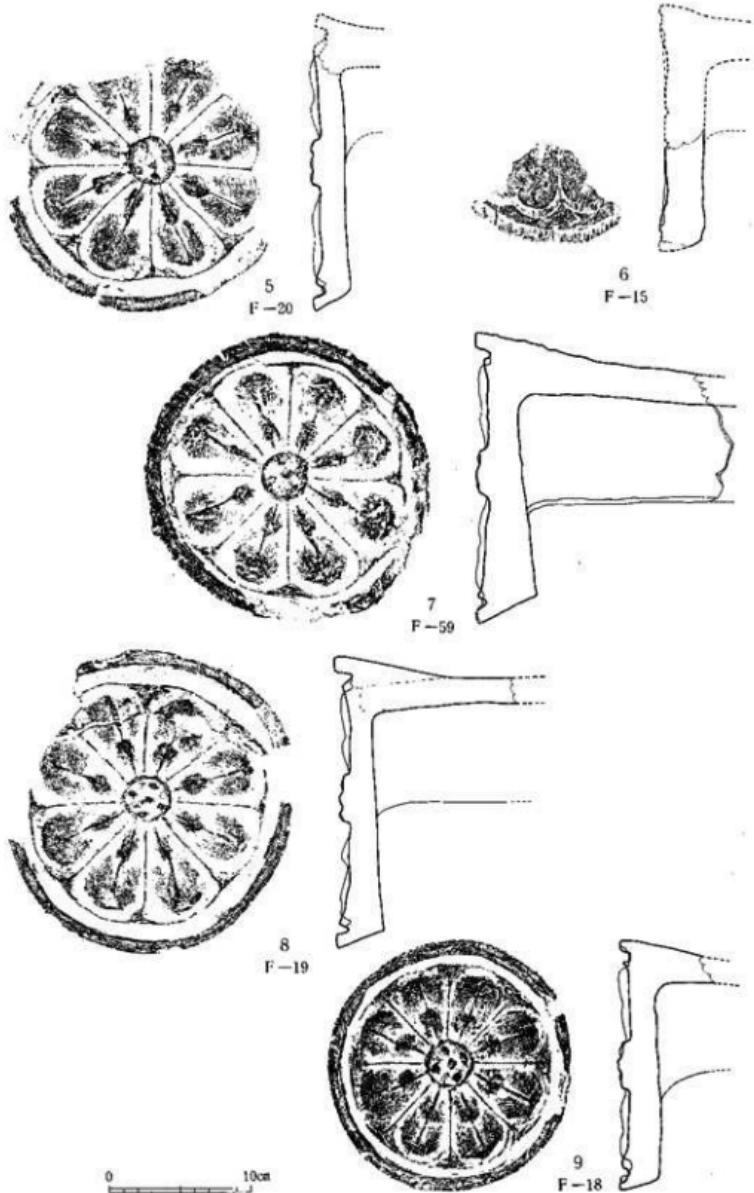


4
F-55

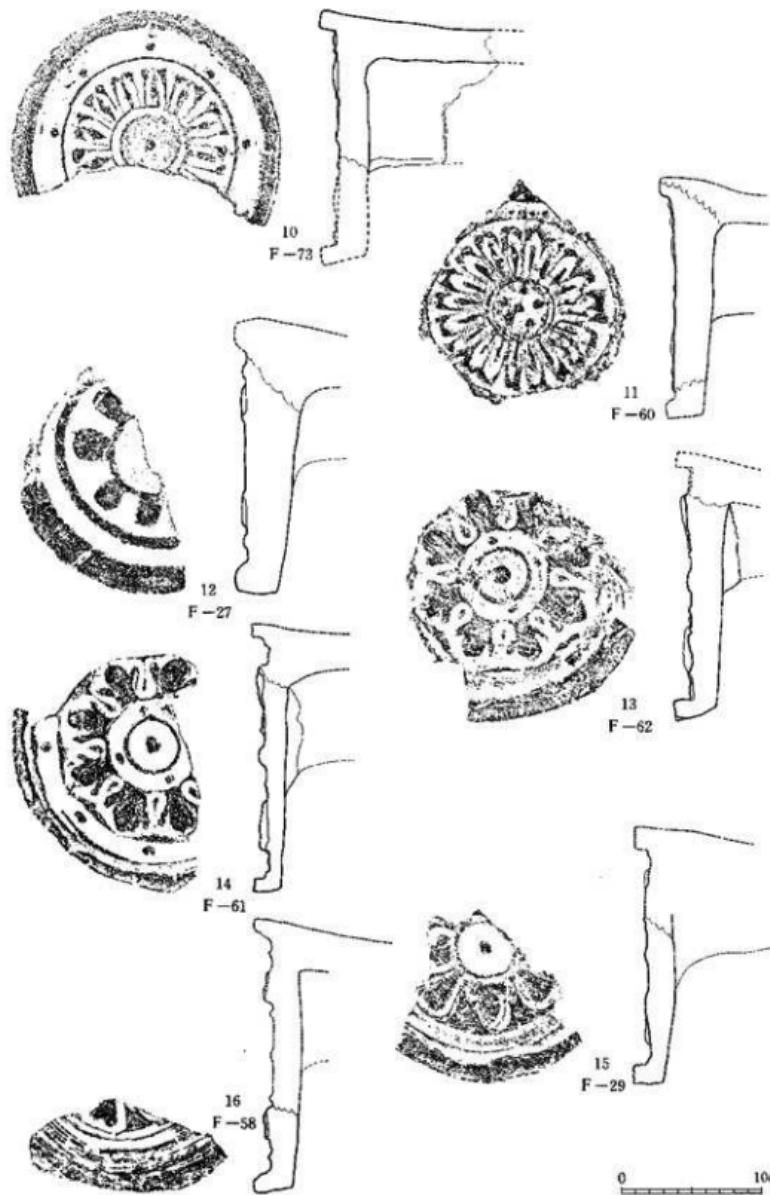


0 10cm

第17図 出土遺物 軒丸瓦(1)

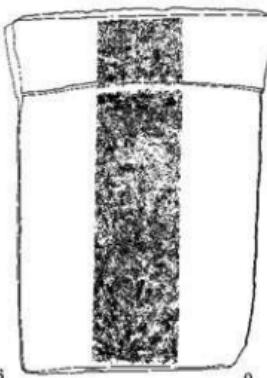
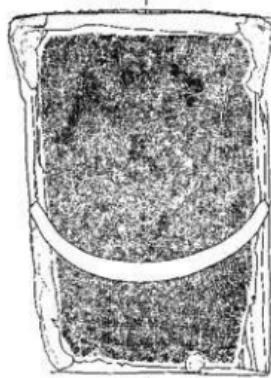


第18図 出土遺物 軒丸瓦(2)



第19図 出土遺物 軒丸瓦(3)

番号	登記番号	種類	地区遺物名	層位	内面	外面	分類	写真
1	G-86	軒瓦	A区 SK-2	埴土	瓦面	瓦面	I類	24-7



0 10cm

第20図 出土遺物 軒平瓦

第3表 出土遺物 軒丸瓦観察表

番号	登記番号	種類	地区遺物名	層位	内面	外面	分類	写真
1	F-51	軒瓦	SK-5	ケズリ 指ナデ	ナデ	ナデ	I類	27-1
2	F-52	*	A区 SK-3	ケズリ後ハラナデ			II類	27-3
3	F-3	*	C区	目層	接合部ケズリの後ナデ	ナデ	II類	28-3
4	F-55	*	A区 SK-3	ナデ	瓦当裏面ケズリのちナデ	ナデ	II類	27-5
5	F-20	*	B区	目層	瓦当裏面ケズリの後ナデ	ナデ	II類	28-2
6	F-15	桜花模様	A区	目層				29-9
7	F-39	面付幾节文	A区 SK-3	接合部ヘラキズ	瓦当裏面	指ナデ	II類	27-4
8	F-19	*	D区	目層	指ナデ	ナデ	II類	27-6
9	F-18	*	D区	目層	指ナデ	ナデ	II類	28-5
10	F-73	桜井葉草文	A区 SK-3	ケズリのちナデ	印日	ナデ	I類	29-6
11	F-60	*	A区 SK-3		瓦当裏面	ケズリのちナデ	II類	29-8
12	F-27	唐草文	B区 抱張	目層	瓦当裏面	ケズリのちナデ	II類	29-5
13	F-62	宝相草文	A区 SK-5	目層	瓦当裏面	ケズリのちナデ	I類	29-2
14	F-61	*	A区 抱張	目層	瓦当裏面	ケズリのちナデ	I類	29-1
15	F-29	*	A区 抱張	目層	瓦当裏面	ケズリのちナデ	II類	29-4
16	F-58	*	A区 SK-25		ケズリのちナデ		II類	29-3

から出土し、体部下半の破片で、底部平底、体部球形で、体部外側へラケズリ、体部内側へラミガキ、黒色処理が施されている。

(2) 須恵器 (第11図6)

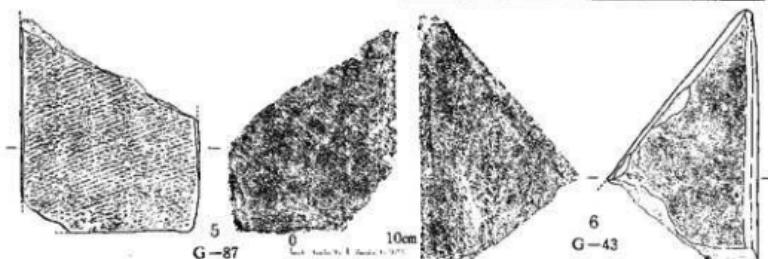
ほとんどが小破片で図化したのは、1点である。SD-2溝跡堆積土から出土し、外面に長さ4.5cm、幅4.5cmの把手が付く破片で、器形は、把手付の壺あるいは瓶と考えられる。

(3) 瓦

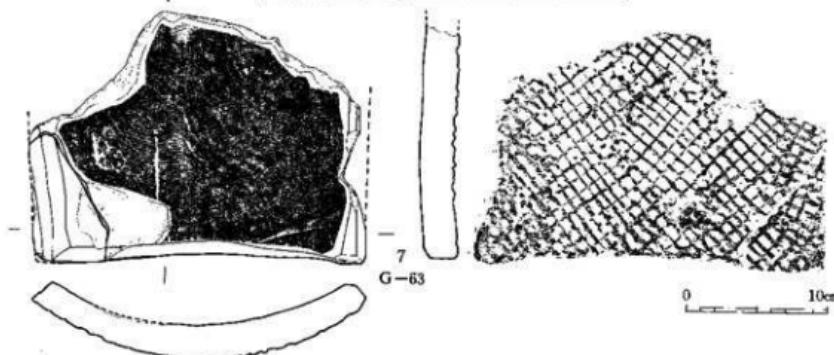
瓦は第I～IV層、築地跡上面、及び崩落上中から多量に出土している。種類は、軒平瓦、軒



番号	形状	寸法	地質	層位	白灰	内面	分厚	年表回数
1	F-39	丸錐	C区SK-1	上層	—	—	—	31-6
2	F-33	丸錐	D	1層	—	—	—	—
3	F-40	丸錐	C区SK-1	中層	—	—	—	31-7
4	G-35	唐草文	B	中層	—	—	—	31-8

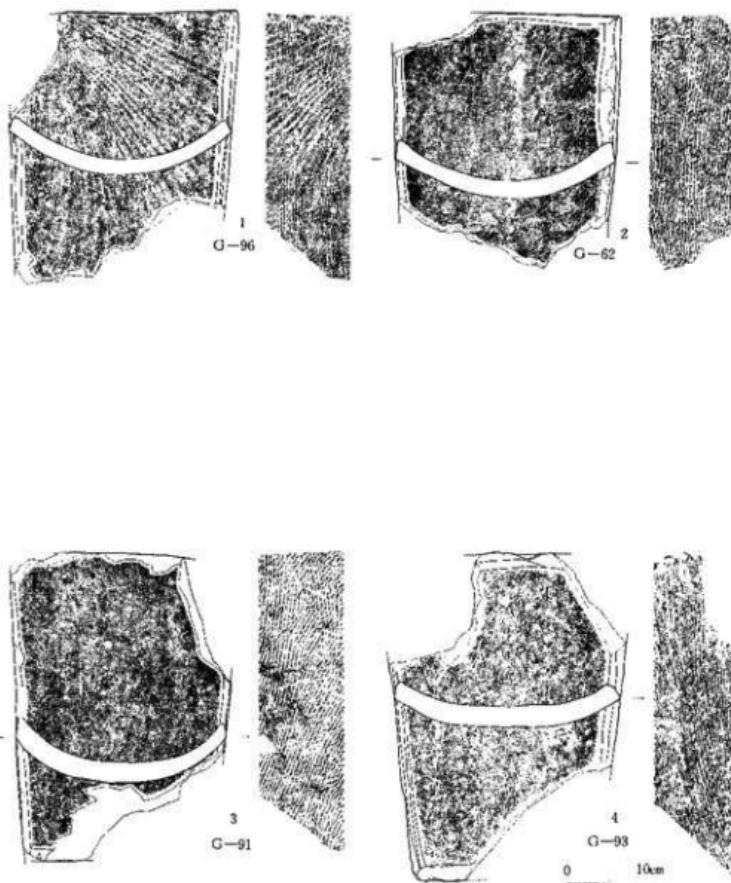


番号	形状	寸法	地質	層位	白灰	内面	分厚	年表回数
5	G-87	寛平瓦	A区 SK-2	壁上	褐色	褐色	31-1	
6	G-43	圓錐瓦	B	中層	褐色	褐色	31-2	



番号	形状	寸法	地質	層位	白灰	内面	分厚	年表回数
7	G-63	平瓦	A区側面	表面	褐色	褐色	31-3	
8	G-48	平瓦	A区 SK-1	壁上	褐色	褐色	—	31-4

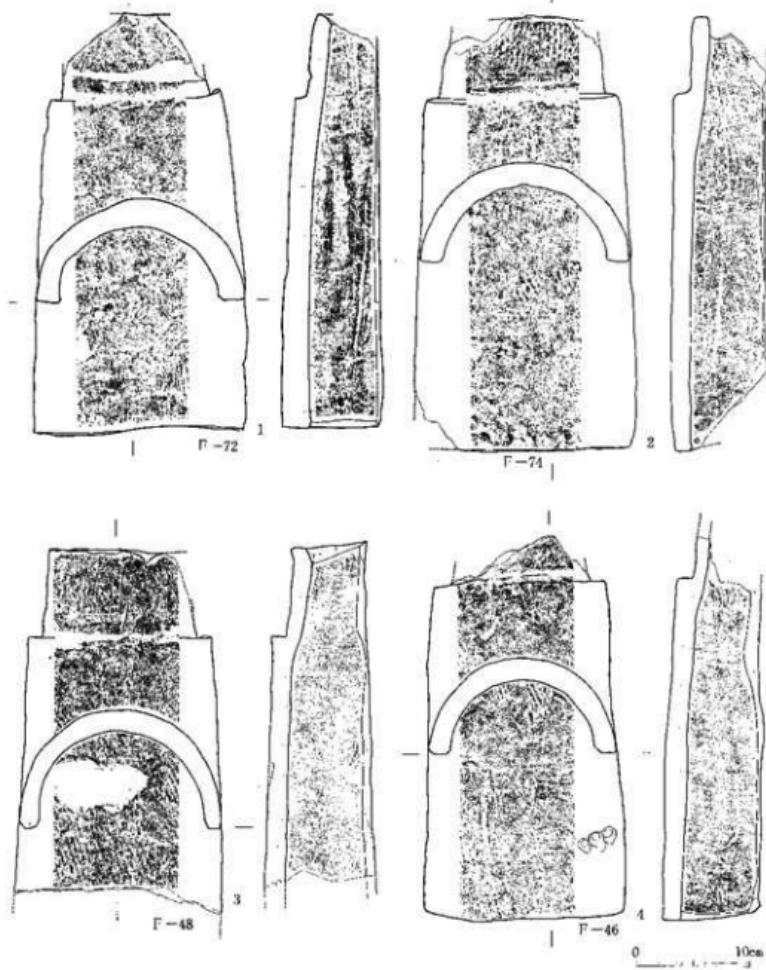
第21図 出土遺物近世瓦・道具瓦・平瓦



平瓦

番号	地図番号	剖面	底	内	外	断面	所	年	考文
1	C-36	平瓦	A-1, SK-5	板土	磚瓦状 木柱跡	有目スザン、中空隙	無	23-1	
2	G-62	平瓦	A-3, SK-3	板土	磚瓦状	有目隙 小空隙あり	無	23-2	
3	G-91	平瓦	A-3, SK-2	板土	磚瓦状	有目隙	無	23-3	
4	G-93	平瓦	A-3, SK-3	板土	磚瓦状	有目隙スザン	無	23-4	

第22図 出土遺物 平瓦



丸瓦

番号	形状	生区	地種	番号	凸	凹	瓦	瓦	瓦	瓦	瓦
1	F-72	A区	SK-3	地上面	高砂多孔 ナガシタコウ	無口	400kg	%	23-7		
2	F-74	A区	SK-3	地	高砂多孔 ナガシタコウ	無口	-	%	23-8		
3	F-48	丸瓦	AISGZ SK-3	地	土	網引瓦片 メイヒンガフバン	無口	-	%	23-5	
4	F-46	A区	SK-5	地	高砂多孔 ナガシタコウ	無口	-	%	23-6		

第23図 出土遺物 丸瓦

丸瓦、平瓦、丸瓦、文字瓦、道具瓦、その他の瓦等である。分類については、陸奥国分寺跡(陸奥国分寺跡発掘調査委員会編)調査報告書の分類基準に準じている。

軒平瓦

軒平瓦は、重弧文、山形文、連珠文、偏行唐草文、均整唐草文等が出土している。総数82点である。

重弧文 (第13図3・5、図版24-5・6)は、B区第IV層、SK-3土壙堆積土から出土している。破片を含め7点出土している。重弧文3は、瓦当面に幅0.9~1.1cm、深さ0.5~0.7cmの二重の太い沈線、頸面は、深頸で二重の太い沈線、鋸齒文が描かれており、頸部末端の二本の沈線は、鋸齒文より先行して施されている。陸奥国分寺跡出土の重弧文は、ほとんどI類であると思われる。5は、頸部末端の沈線上に朱が付着しているのが認められる。

山形文 (第14・15図、図版25・26)は、SK-3土壙、ピットNo.2、第IV層等から破片を含めて総計17点出土している。瓦当面には、連續山形文を太い範囲のもので描き、山形文に規則性は認められない。(第15図4、図版25-1)は、波状の山形文であり、(第15図5、図版25-3)は、瓦当面の両端部まで太い範囲のものが描かれ、山の数は、5個及び6個が多いようである。頸部凸面の調整を観察すれば、ほとんど繩叩き目で、のち頸端部は、スリケシが施されている。(第15図3、図版25-2)は、頸部凸面繩目のないもので、全面スリケシが施され、朱が幅5cm程度付着している。

連珠文 (第13図1・2、図版26-3、図版25-6)は破片を含め総計8点出土している。(第13図1、図版26-3)は、I類でSK-2土壙から出土し、瓦当面に大型の珠文を並べている。(第13図2、図版25-6)は、II類で、SD-2溝跡から出土している。珠文と珠文に上下の縁の間に三角形の部分を残しており、陸奥国分寺出土の連珠文の中で多い種類である。

偏行唐草文 (第13図、第20図、図版24-1・2・3・4・7)は、破片を含め総計40点出土し、陸奥国分寺跡の軒平瓦の中で最も多く出土している。(第20図、第13図7、図版24-7)は、I類でB区IV層及びSK-3土壙から出土している。I類は渦状に走る唐草文を太い隆線であらわし、上下に細線で珠文を配している。頸部は深頸有段である。7は、凸面が繩叩きのち、目の荒い斜格子状に叩き消している。(第13図4・6)は、III類で、B区第III層、SD-2溝跡から出土している。II類はI類に類似し、瓦当面に渦状に走る太い隆線が半扣で浅くなっている、上下の珠文間の細線がないものである。(第16図2、図版24-4)は、IV類で、SK-5瓦溜め構造から出土している。IV類は、太い隆線であらわす唐草文が第I・III類と異なって、左から右に走る唐草文をもち、頸部は、無段で横繩叩き目、が施されている。

均整唐草文 (第15図・第16図)は、破片を含め総計10点出土している。I類はB区III層から出土している。I類は、瓦当面の中央から左右に唐草文が伸びている。頸部には沈線と波状に



番号	號	地點	地圖位置	層位	凸面	凹面	分類	文字
1	F-2	大瓦		層 1	面 口	面 口	30-1	
2	F-50	大瓦 A 区		鐵小便器, 「月」	面 口	+	30-2	
3	F-87	九尺 A 区		層 2	「丁」	面 口	+	30-3
4	F-64	九尺 A+SK-5		堆 土 「丁」?	面 口	+	30-4	
5	G-102	平瓦 A 区		II 層 門口 H 面	面 口	+	30-5	
6	F-86	大瓦 廢地井壁土		II 層 X、Y 面	面 口	面 口	30-7	
7	G-1	平瓦		II 土 門口 X 面	面 口	面 口	30-6	
8	F-85	大瓦 A 区		III 層	面 口	面 口	30-8	
9	F-53	A+SK-3		堆 土 ナ ド	面 口	面 口	30-10	
10	G-77	平瓦 SK-5		堆 土 門口 H 面	面 口	面 口	30-9	
11	G-43	平瓦 A 区		H 面 門口 X 面	面 口	面 口	30-11	
12	F-28	大瓦 B 廢地		N 面 ナ ド	面 口	面 口	30-12	

第24図 出土遺物 文字瓦

連続して描かれた銀齒文が見られる。(第15図1、2、第16図1、図版25-5、図版26-2・5)は、II類で、SK-5瓦溜の遺構から出土している。II類は、均整唐草文の中でも出土量が多く、瓦当面の唐草文は、陰刻か陽刻かはっきりせず、頸部は無文である。

軒丸瓦

重弁蓮華文は、第I～V層、各遺構から総計46点出土している。第I～IV類まで出土し、特にIV類は、9点を数える。(第17図1、図版27-1)は、I類で、SK-5瓦溜め遺構から出土している。I類は、花弁の弁端が盛り上がり、中房上の蓮子が1個の珠文を中心に4個の小花弁状のものが十字形に配しており、瓦当直径は、21.7cmを計る。(第17図2、図版27-3)は、II類で、SK-3土壤から出土している。II類は、I類に類似するが、中房上の蓮子が円形になっている。(第17図3・4、第18図7、図版28-3,27-5・4)は、IV類で、第III・VI層、SK-3土壤、SK-5瓦溜め遺構から出土している。瓦当直径が19～21cm程度である。V類は、B区拡張区第III層から出土している。V類は、花弁と花弁の間の線が太く、花弁が磨滅している。(第18図9、図版27-6)は、VI類で、D区第III層から出土している。IV類は、重弁蓮華文中、瓦当直径が小さく17.6cmを計る。

細弁蓮華文(第19図10・11、図版29-6・8)は、K-3土壤から2点出土している。(第19図10)は、I類で、推定直径18.0cm、12葉の細い花弁、蓮子は、中央に一個だけ外区に8個の珠文を配している。(第19図11)は、II類で、推定直径17.0cmで20葉の細い花弁、中房に1+5の蓮子を配して、外区内側に21個の珠文を配していると思われる。

宝相花文(第19図13～16、図版29-1～4)は、破片を含めて5点出土している。(第19図13・14)は、I類で、SK-3土壤、A区拡張区層から出土している。I類は、推定直径が、いずれも19.0cm、中房中央に大型の蓮子を1個配して円環をめぐらし、外側に4個の珠文を配している。また忍冬花文状のものを8葉を配して外区に8個の珠文を有している。(第19図16)は、III類で、SK-5瓦溜め遺構から出土している。III類は、中房中央に5個の蓮子を十字に配して、外区に一条の龍線を巡らしている。(第19図15)は、IV類で、A区拡張区III層、SK-5瓦溜め遺構から出土している。IV類は、中房に1個の蓮子を配し、三葉状と無葉花状の文様を交互に配し、外区には、8個の珠文を配していると思われる。

齒車文(第19図12、図版29-5)は、B区拡張区第IV層から出土している。推定直径19cm、8個の舌状の文様が齒車状に並び、中央に大型の蓮子を有する。

桜花様文(第18図6、図版29-9)は、1点だけA区第IV層から出土している。これまで陸奥国分寺跡調査で、1点、薄堂西側基壇上から出土したのみである。瓦当面は推定直径17.5cm、破片の為、全体の形は不明であるが、5枚の花弁を有する桜花状の花文を配していると思われる。

平瓦

平瓦(第22図1~4、図版23-1~4)は、出土遺物中、破片を含め大半を占めており、第I~V層から出土し、特にSK-3上縁、SK-5瓦溜め造構から、整理用平箱で、60箱出土している。そのうち図化したのは、4点である。凹面は、目の細い布目が多く、全体的にスリケシされたのが大半を占め、中央部分に布目を残し、両側端にスリケシされている。また(第22図1)は凹面に糸切り痕が放射状に残っている。凸面は、縱方向に繩叩きされているのが大半を占めているが、一部斜の方向のもの、一部スリケシが施されているものもある。全体的に平瓦を概見すれば、ほぼ同様の調整技法が施され、凹面は、糸切り→布目→スリケシ、凸面は、縱方向の繩叩きのうち一部スリケシが施されている。形状は長方形に近く、長さ36~38cm程、広端幅27~28cm程、狭端幅23~25cm程と思われる。全体的に大きな違いは認められないが、巾には(第21図7)の凸面に、斜格子叩き目が施され、また(第21図8)は、凸面が、繩叩きされ幅3.5cm、長さ7cmの単位で繩叩き目を叩き消しているのが見られる。

丸瓦

丸瓦(第23図1~4、図版23-5~8)は、小破片を含め多量に出土し、第I~V層、及び各造構から出土している。そのうち図化したのは、4点である。丸瓦は、玉縁付の有段丸瓦で、粘土組合作りである。筒部凸面は、繩叩きのうちナデ調整を施している。筒部凹面は、布目、一部ナデ調整が施されている。玉縁部は、回転を利用してナデ調整され、筒部より玉縁端にかけて少々器高が低くなるものがある。

道具瓦

隅切り瓦(第21図6、図版31-2)は、B区V層出土で、1点出土している。右上の広端縁隅から側縁にかけての破片で、凹面布目、凸面繩叩きである。隅切り瓦は、広端縁隅右上から左下へ約50°の角度で切り落している。

熨斗瓦(第21図5、図版31-1)は、A区SK-3土壠堆積上出土である。凸面は繩叩き目、凹面は布目で糸切り痕跡が残り、端部を整形している。瓦の全形は不明であるが、残存する狹端幅が16cmを計る。陸奥国分寺跡出土の平瓦は、遺存するものから計ると、長さが36cm~38cm程、広端幅が27~28cm、狭端幅が24cm前後と推定される。推定の域ではあるが、熨斗瓦の長さは平瓦とほぼ同一と思われ、平瓦を分割すれば、3分割になると推察される。ただ1点だけの出土の為、今後の増加を期したい。

文字瓦

瓦に文字を記した文字瓦は、文字のあらわし方に刻印を捺したもの、指先で書いたもの、籠で書いたもの等、三種類がある。

刻印文字瓦(第24図1~5、7、図版30-1~6)は、表土から3点、A区第II層から1点、A区第III層

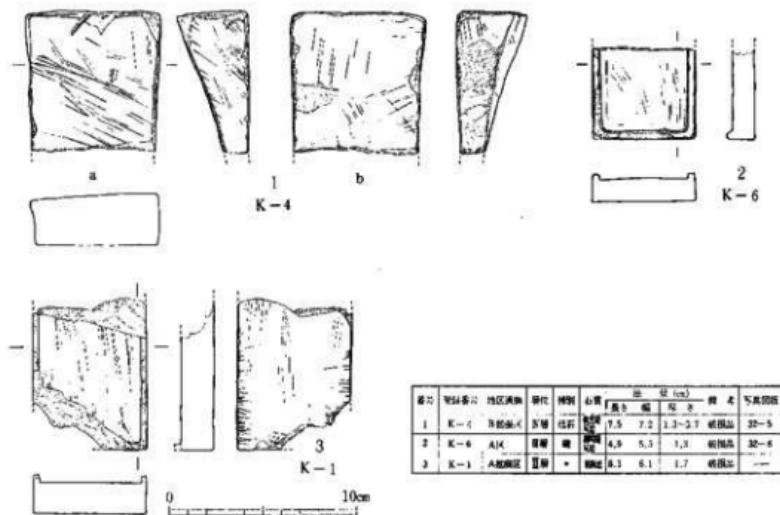
から1点、SK-5瓦溜め遺構堆積上から1点、合せて6点出土している。その内判読出来るものは、「万」、「占」、「木」と3点である。刻印されている瓦は、丸瓦・半瓦で、丸瓦では、凸面に刻印され、(第24図1)は、玉縁部付近の箇部に「占」と刻印されている。また(第24図3)は、凸面に直径2.7cmの丸形で刻印されている。(第24図5・7)は、凹面布目に刻印されている。

指書文字瓦(第24図9・11、図版30-10・11)は、A区Ⅳ層、SK-3土壌堆積上出土のもので、2点出土している。(第24図11)は、平瓦凹面布目に指書され、破片の為、判読不明である。また(第24図9)は、丸瓦凹面布目に指書されているが判読不明である。

ヘラ書き文字瓦(第24図6・8・10・12、図版30-7・8・9・12)は、A区第Ⅲ層、第Ⅳ層B区拡張区第Ⅳ層、C区第Ⅲ層、SK-5瓦溜め遺構等から5点出土している。ヘラ書きされているのは、平瓦が凹面布目、丸瓦が凹面布目で、大半は、判読不明である。(第24図10)は、SK-5土壌出土のもので、凹面布目に「大」とヘラ書きされ、また(第24図6)は、A区第Ⅳ層出土のもので、丸瓦凹面布目に、「×」か「十」がヘラ書きされている。

その他の瓦

その他の瓦は、第I～IV層、SD-1溝跡等から合計24点出土している。軒平瓦(第21図4、図版31-8)は瓦当の厚みが薄く、瓦当面に菊花、左右に唐草を配したものと思われ、同一文様の瓦を4点出土している。軒丸瓦(第21図1・3、図版31-6・7)は、瓦当面に円形の九曜文を



第25図 出土遺物 磚石・瓦

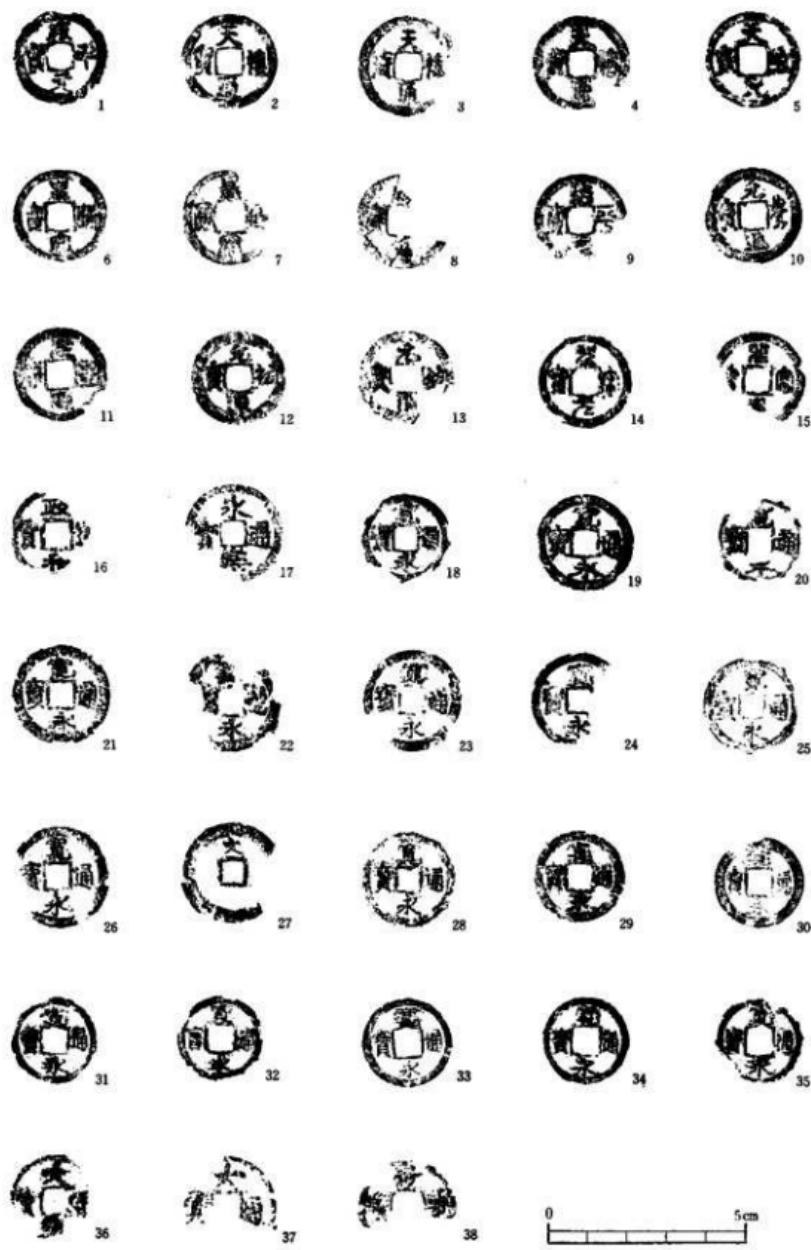
第4表 古銭觀察表

No.	錢名	地区遺構名	層位	時代	初時年(西暦)	素材	備考	遺物番号
1	成平元寶	A区	Ⅲa 層中	北宋咸平元年(998)	銅			N-19
2	天禧通寶	A区	Ⅲa 層中	+	天禧年間(1017~)	+		N-24
3	+	A区	+	+	*	+		N-22
4	+	A区	+	+	*	+		N-23
5	天聖元寶	A区	Ⅲa 層中	+	天聖元年(1023)	+		N-20
6	皇宋通寶	A区	+	+	宋元2年(1039)	+		N-26
7	+	A区	+	+	*	+		N-25
8	?	A区	Ⅲa 層中	+	*	+		N-37
9	治平元寶	A区	+	+	治平元年(1064)	+		N-27
10	元豐通寶	A区	Ⅲa 層中	+	元豐元年(1078)	+		N-21
11	?	A区	+	+	*	+		N-28
12	元祐通寶	A区	+	+	元祐元年(1086)	+		N-29
13	+	A区 SK-4	+	+	*	+		N-14
14	聖宋元寶	A区	Ⅲa 層中	+	建中酒園元年(1101)	+		N-30
15	+	A区 SK-4	+	+	*	+		N-17
16	政和通寶	A区 SK-4	+	+	政和元年(1111)	+		N-16
17	水樂通寶	A区	明	水樂6年(1408)	+			N-33
18	寛永通寶	A区	Ⅲa 層下江戸	寛永3年(1625)	+	古寛永狹穿		N-32
19	+	B区	Ⅱ 層	+	寛永14年(1637)	+	高田銭占寛永	N-7
20	+	A区	Ⅲa 層	+	+	高田銭肥水小字占寛永		N-12
21	+	A区	Ⅱ 層	+	+	古寛永延仁寺銭		N-10
22	+	A区 SK-4	+	+	+	岡山銭長穂子逃点寛		N-15
23	+	A区張瓦	Ⅲa 層	+	+	岡山銭長穂子肥字		N-34
24	+	A区	表採	+	+	仙台銭		N-31
25	+	B区	Ⅲa 層	+	寛文8年(1668)	+	新寛永正字文	N-13
26	+	A区	Ⅲa 層	+	亨保13年(1728)	+	重押通無行(石巻)	N-8
27	+	B区	Ⅱ 層	+	元文元年(1736)	+	輪十綿込	N-6
28	+	+	+	+	+	虎ノ尾寛		N-7
29	+	A区	+	+	元文2年(1737)	+	小梅手印寛	N-4
30	+	—	+	+				N-3
31	+	A区	Ⅲa 層	+				N-9
32	+	B区	Ⅱ 層	解				N-18
33	+	A区	Ⅱ 層	層				N-35
34	+	A区	—	+				N-36
35	大()通寶	A区	Ⅲa 層	—	—			N-11
36	大()通寶	A区	Ⅲ 層	—	—			N-38
37	背既不能	A区	Ⅱ 層	—	—			N-39

配したもので5点出土している。また小破片であるが、色文軒丸瓦を6点出土している。丸瓦は、玉縁付のもので、4点出土している。凹面布目で、そのうち1点は、凹面布目に幅1cm程の溝状の筋目が3本見られる。また玉縁部長は5.1cmを計る。平瓦は2点出土し、1点は側端部付近に一辺1cm四方の穴を柄っている。これらの文様及び、器形等から、その他の瓦はいずれも近世以降の瓦と思われ、薬師堂関係の屋根に葺かれたものと考える。

陶磁器

陶磁器は、ほとんど破片で、固化したのは、7点である。出土した遺物は、全てⅠ層から



第26図 出土遺物 古銭

Ⅲ層、及び旧トレンチ内埋土から出土したものである。碗（第12図1）は、Ⅱ層出土で、体部外面下半の破片で、数条の縫を有し、外面が赤褐色の鉄釉、内面が灰オリーブ色の灰釉を施している。この種の器形は、福島県金谷館跡、多賀城跡作貢地区から出土している碗に類似する。小鉢（第12図4）は、旧トレンチ内から出土しているが、特徴等から明治初期の平清水のものと思われる。皿（第12図5）は、野草の染付を配したもので、底部外面に、断片であるが、「皿」と描かれていることから伊万里と考える。全体的に破片を概観すると、江戸時代中期以降のものが大半を占めている。さらに産地については、半数が相馬、上野日と思われ、若干伊万里が含まれ、中には17c初期のものが見られる。

石製品（第25図1～3、図版32-5・6）

砥石（第25図1、図版32-5）：B拡張区基本層位Ⅳ層より1点のみ出土している。破損品のため、全長は不明である。a面は使用による消耗のためか、中央部付近が著しい凹状を呈す。a、b、左右側面とも傷状の擦痕が多数認められ、特にa面は深く明瞭である。

硯（第25図2・3、図版32-6）：A（拡張）区基本層位Ⅱ・Ⅲ層より各1点出土した。ともに海部を欠損する長方硯である。2は3に比べ一回小さい。両者とも平面形は長方形で、側面は垂直に立ち上がる長方形のものと思われる。陸部は隅丸長力形（2）、長方形（3）。周縁は1段（3は欠損のため不明）、裏面はともに平凹面を呈する。尚、3の裏面縁辺には、傷状の擦痕が認められる。

金属製品（第26図）

古錢（第26図）：A・B区基本層位Ⅱ～Ⅳ層より32点、SK-4より4点に表掲資料の1点を加えた計37点出土した。これらの内、中国錢は19点（1～17、35・36）、日本錢は17点（18～34）、生産地不明のものが1点（37）である。中国錢は、判読可能なものの内、永樂通宝（17）の1点を除き、他は全て北宋錢である。北宋錢には初鋤年998年の咸平元宝（1）から1111年の政和通宝（16）までの9種類が認められる。日本錢は全て寛永通宝で、古寛永が8種8枚（19～25）、新寛永が5種9枚（26～34、内31～34は種類不明）である。これら古錢は数枚のまとまりをもって出土する場合が多く（-括出土A～D）、その内の3点（1・5・6）、8点（2～4・6・9・11・12・14）は密着し出土した。尚、基本層位Ⅳ層中よりは、永樂通宝（初鋤年1408年）1点のみの出土で、日本錢の混在は認められなかった。

鉄滓（図版32-8・9）：A～D区基本層位Ⅰ～Ⅳ層より8点、遺構内（SK-1・3・5）より7点の計15点出土した。ほとんどが外面粗鄙で、塊形を呈し、多くは凸部に粘土を付着する。8はSK-3堆積土出土のものである。出土資料中では最も大形（約15×11×6cm）のもので、凸部には粘土の付着が顕著に認められる。9はSK-1堆積土出土のものである。厚さ約6cmの粘土上に鉄滓が付着したような状態で、鉄滓中に木炭が埋め込まれている。粘土中にはスサが

入れられており、おそらくこの粘土部分は、炉床あるいは炉壁の一部分かと思われる。これら鉄滓の外観から、その多くは鐵冶滓に属するかと考えられる。

土製品（第12図8・9・10、図版32-7）

羽口：D区基本層位より2点、SD-2より1点の計3点出土した。全て破片資料で、全体の形態の判るものはない。8と9は同一個体の可能性もある。外径は8が約5.5cm、9・10が約6.5cm、孔径はともに2.5cm前後、器厚は8が約1.5cm、9・10が約2cmで、9・10の方が8よりひとまわり大きい。外面は縦位の削りによる整形後、横位のナデによる調整が行なわれるもの（9）と、調整が行なわれないもの（8）に別けられる。内面には8・9とも斜位の擦痕が認められる。これは棒状のものに粘土を巻き付け羽口を作成し、最後に回転しながらこれを引き抜いた際の擦痕とも考えられる。資料は全て二次加熱による赤色化が顕著で、炉体側と思われる部分の外面には、鉄滓の付着がみられる。

V. まとめ

今回の調査は、環境整備に伴う、南大門跡東脇築地跡の発掘調査である。

築地跡の調査は、過去数回行なわれており、特に昭和31年度には、現仁王門の東端から真東14.4mの地点、さらに63mの地点に調査区を設定している。その結果、「黄褐色を呈する自然の地山を22尺幅に削って整地し、その上に土壘を造成…」と報告している。また昭和48年度の南辺築地跡の調査では、築地本体の遺存幅が2.2m、現存する高さが50~60cm、また黄色土、黒色土による細かい瓦層を形成し版築していること等が、判明している。これらから、陸奥国分寺跡の南辺の区画施設の構造が明らかにされつつある。

今回の調査では、築地跡の遺存状況、築地基礎事業等の確認と、昭和31年時の調査成果を補強する目的で実施した。これまでの調査では、現仁王門の位置に、陸奥国分寺南大門跡であることが確認され、また南大門跡真東延長線上一帯は、現在でも土壘状に高まりが確認されている。築地跡は、木の根、民有地のブロック塀等の攪乱により削平されているが、遺存状況の良好な所で、旧表土を南北幅3.1m程掘り込み、築地基底面からの残存高0.4m程、築地幅2.7mである。遺存する築地跡内外から10数個検出されたビットは、柱穴の間隔が不規則であり、また検出状況等から築地跡に伴う寄柱としては確認出来なかった。陸奥国分寺跡伽藍を区画する施設は、これまでの調査で、東辺が築地と溝、西辺が獨立柱列と溝、南辺で築地を確認している。今回の調査で南辺を区画する施設は、築地と築地の外側2.0m程離れた溝であることが一層明らかになった。調査区北半で検出されたSK-5土壤は、丸頭が堆積上層から基底面までほぼ密接してぎっしり積み重なって出土している状況から、瓦溜め造構と思われる。瓦溜め造構から出土する瓦には、丸瓦・平瓦であるが、文様瓦も多く、軒平瓦の頭部端部に丹が付着しているもの

も認められる。堆積土層ごとのまとまりが全く認められないが、少なくとも使用され、瓦が廃棄され、埋められたものと思われる。

出土遺物の大部分が瓦類で、整理用半箱で250箱程になり、文様瓦片で152点、その内訳は、軒平瓦82点、軒丸瓦70点である。軒平瓦では、重弁蓮華文が出土軒平瓦の87%、軒丸瓦では、偏行唐草文が出土軒丸瓦の49%、山形文が20%占めている。これまでの調査でも重弁蓮華文・偏行唐草文は陸奥国分寺創建時の組み合わせとして建物に多く使用されたものと思われる。さらに重弁蓮華文の第Ⅰ類～Ⅵ類が出土し、特に第Ⅰ類は中房上の蓮子が十字状になっており、多賀城跡のⅠ期の重弁蓮華文221に類似し、重弁蓮華文の中でも古いものと思われる。出土量の少ない軒丸瓦の宝相華文、細弁蓮華文、唐草文、軒平瓦の均整唐草文、連珠文、山形文、宝相華文等は、陸奥国分寺跡出土の瓦の中で新しいグループに入り、建物の瓦の替換用及び、補修瓦と考えられる。また軒丸瓦の桜花様文軒平瓦は、1点出土し、過去の調査でも講堂西側基壇上から1点出土しているだけで類例が乏しく、今後の増加に期待したい。

参考文献

- 東北古瓦図録 原田良雄・石田茂作 雄山閣
「多賀城跡一政 庁跡調査編」宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所 1980. 3
陸奥国分寺跡 陸奥国分寺跡発掘調査委員会編 河北文化文化事業団 1961. 10
陸奥國宮室跡群Ⅱ 古董跡研究会 1981. 3
郡山遺跡Ⅰ～Ⅲ 仙台市文化財調査報告書第29・38・46集 1981～3
史跡陸奥國分寺跡 仙台市文化財調査報告書第27集 1981. 3
折江遺跡 仙台市文化財調査報告書第18集 1980. 3
「古代の瓦」 日本の美術66号 1971. 11
「国分寺」 日本の美術171号 1980
多摩ニュータウン遺跡Ⅰ (財) 東京都埋蔵文化財センター 1982. 3
今泉遺跡 仙台市文化財調査報告書第58集 1983. 3
燕沢遺跡 仙台市文化財調査報告書第39集 1982. 3
多賀城跡 宮城県多賀城跡調査研究所年報 1980
神明社室跡 仙台市文化財調査報告書第54号 1983. 3
「本瓦器の技術」 太田博太郎・井上新太郎 彰国社 1974
日本貨幣型録 83年版 日本貨幣商協同組合
金谷館跡 観島町文化財調査報告書第82集 1980. 3
「相馬のやきもの」 高橋良・ふくしま文庫 1977. 3
日本の陶磁 五島美術館

付 章

陸奥国分寺跡土壤分析

東北大学農学部助手 山 田 一 郎

陸奥国分寺南大門東脇築地跡上壤の粒度組成は、全層ともシルト(2~20μ)と粘土(2μ以下)が大部分であり、土性は、全て Lic (輕埴土) と細粒である。

版築土層 5~6層は黒褐色の土色をもつ部分と明褐色の土色の部分からなり腐植を含む。版築土層 8層は暗褐色の層であり腐植を含む。版築土層 10~12層は黒褐色の部分から成り腐植を含む。版築土層 8層は暗褐色の層であり腐植を含む。版築土層 10~12層は黒褐色の部分と黄褐色の部分から成り腐植を含む。

掘り込み事業土層 E層は、黒褐色の腐植に富む層である。

陸奥国分寺跡土壤の性質

試 料 No.	土 色	粒 組	粒 度	組 成 (%)	土 性
版築土層 5~6層	7.5YR 8/6, 10YR 8/4	粗 砂	3	15 38 41	Lic
版築土層 8 層	7.5YR 8/6	*	6	17 39 43	*
版築土層 10~12層	10YR 8/6, 10YR 8/4	*	10	18 39 42	*
掘り込み事業土層 E層	7.5YR 8/6	粗 砂	5	18 37 40	*

写 真 図 版

図版 1
調査前全景



図版 2
調査区全景



図版 3
築地跡全景



図版 4
調査区北半塗地崩
落土上面遺物出土状況



図版 5
SK-3 土壠
遺物出土状況



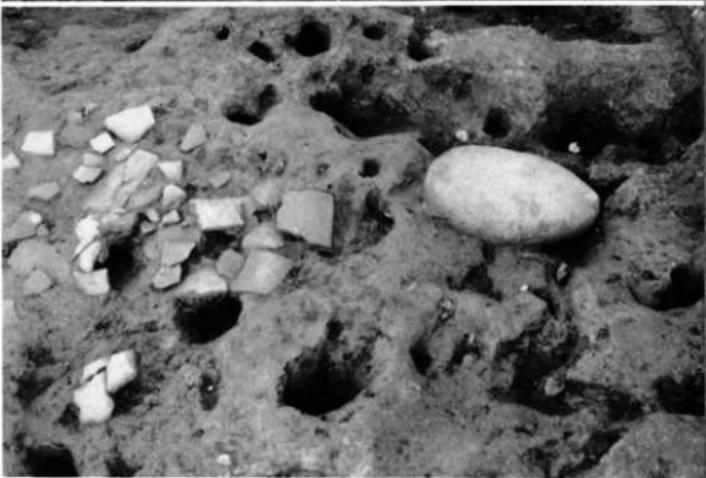
図版 6
調査区Ⅳ層上面
遺物出土状況



図版 7
SK-5 瓦溜め造構
遺物出土状況



図版 8
築地跡上面
瓦出土状況



図版 9
SK-5 瓦溜め造構
遺物出土状況



図版10
築地崩落土上面
遺物出土状況



図版11
SD-2溝跡
遺物出土状況



図版12(左)
SD-2溝跡
遺物出土状況



図版13(右)
SD-2溝跡
遺物出土状況



圖版14（左）
文字瓦出土狀況



圖版15（右）
均整唐草文軒平瓦
出土狀況



圖版17
重弁連華文軒平瓦
出土狀況





図版18 SK-5瓦溜め造構断面

図版19 築地跡基底部断面

図版20
旧トレンチ

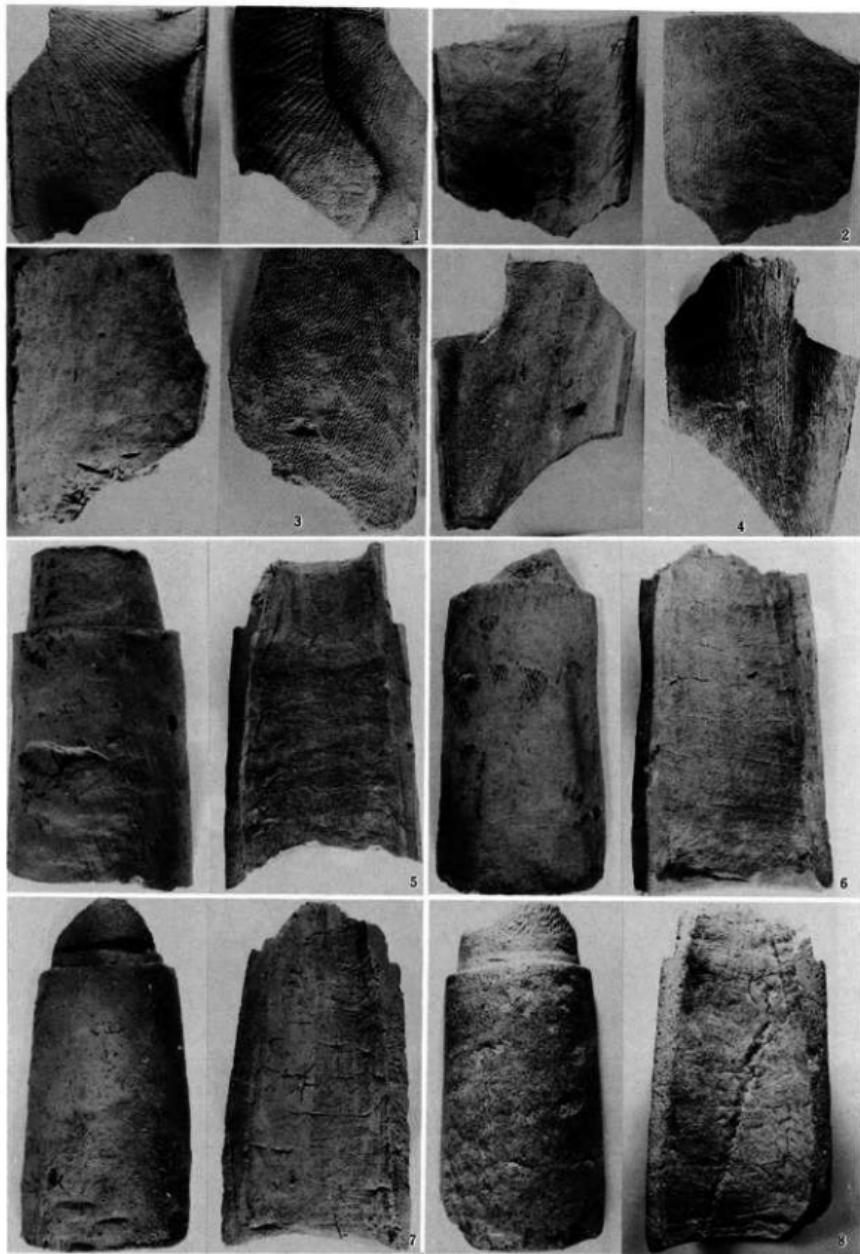


図版21
SK-3・5 完掘全景



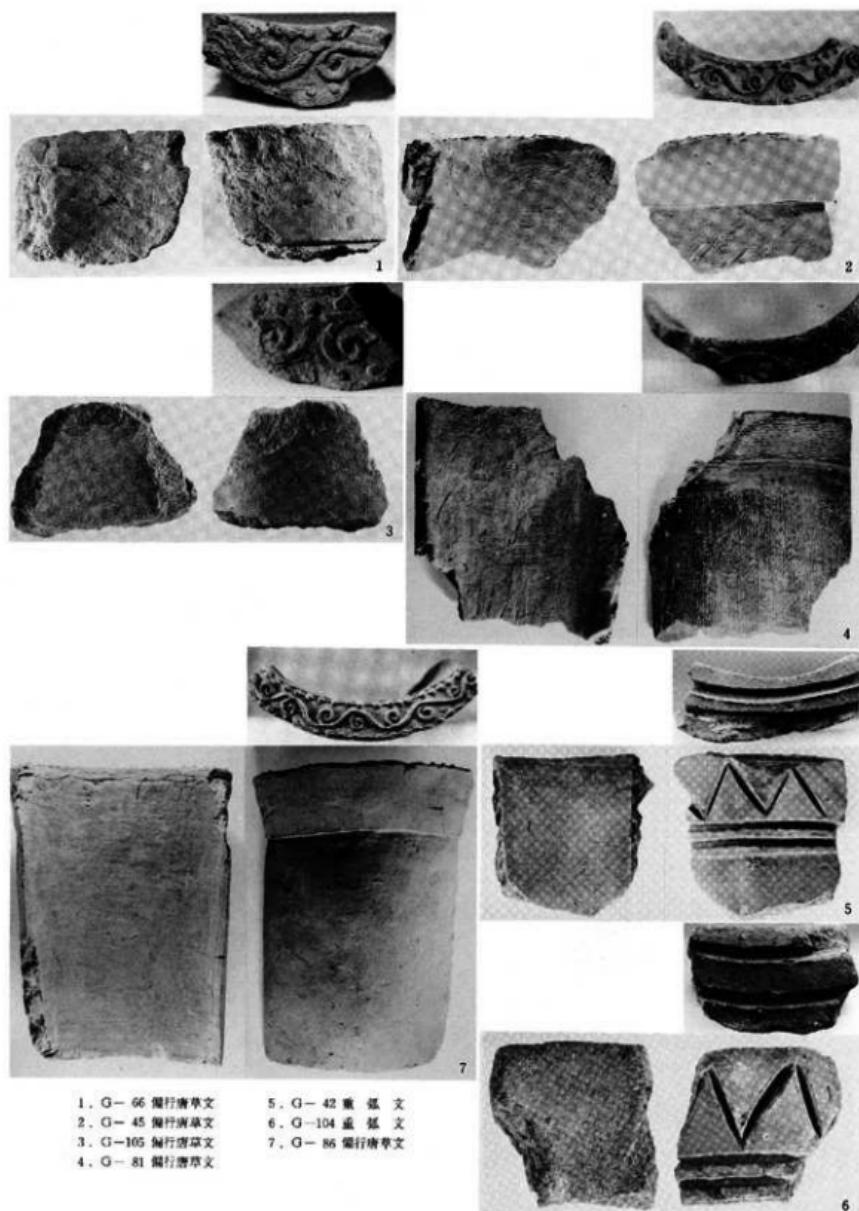
図版22
現地説明会風景



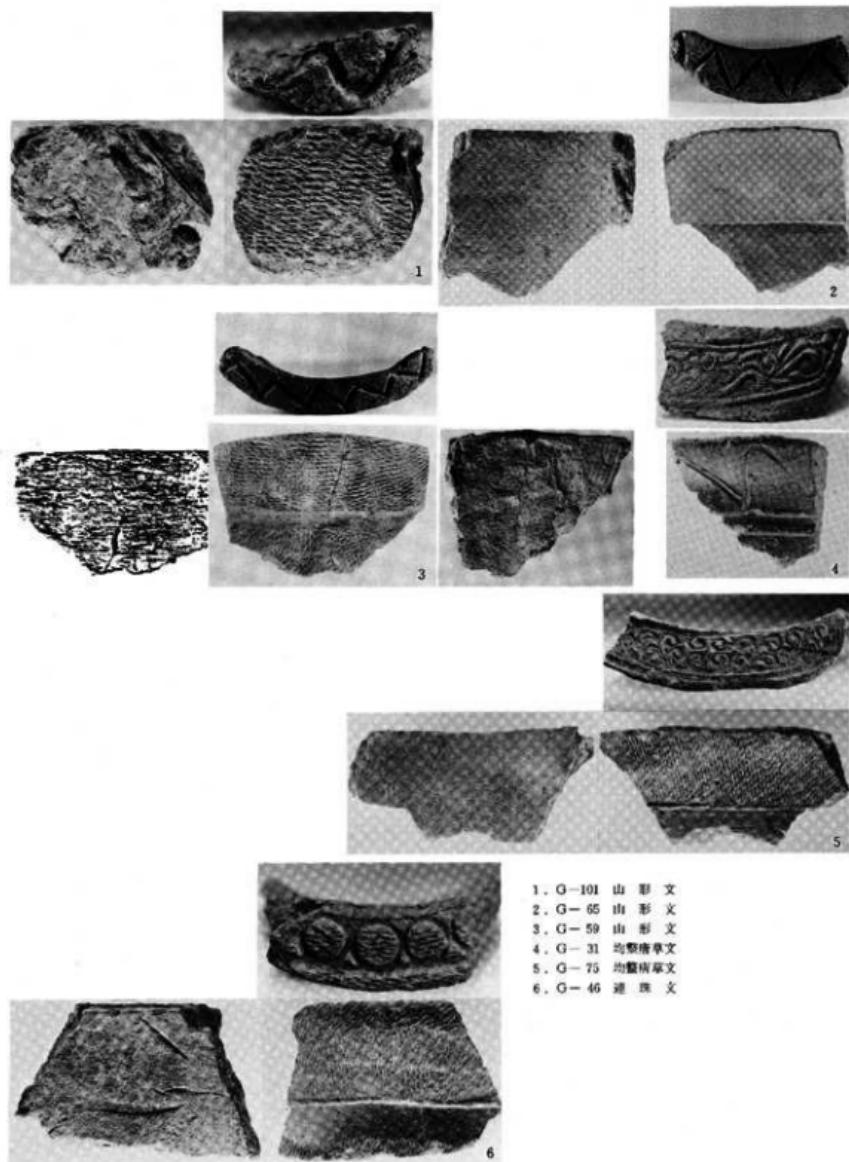


1. G-96 平瓦
 3. G-91 *
 5. F-48 丸瓦
 7. F-72 *
 2. G-62 平瓦
 4. G-93 *
 6. F-46 丸瓦
 8. F-74 *

图版23 出土遗物 平瓦·丸瓦

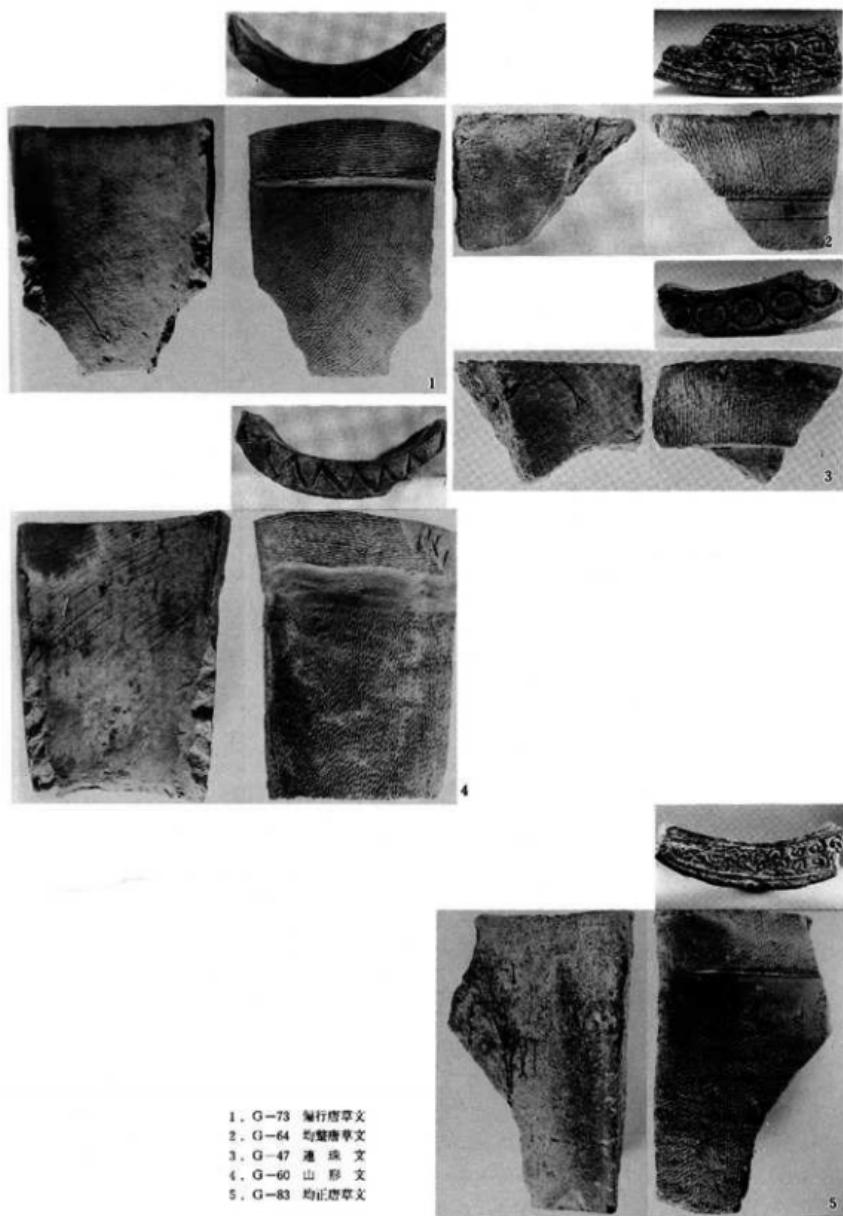


圖版24 出土遺物 軒平瓦



圖版25 出土遺物 軒平瓦

- 1. G-101 山 形 文
- 2. G-65 山 形 文
- 3. G-59 山 形 文
- 4. G-31 地 繫 唐 草 文
- 5. G-75 地 繫 唐 草 文
- 6. G-46 連 珠 文



圖版26 出土遺物 軒平瓦



1



2



3



4



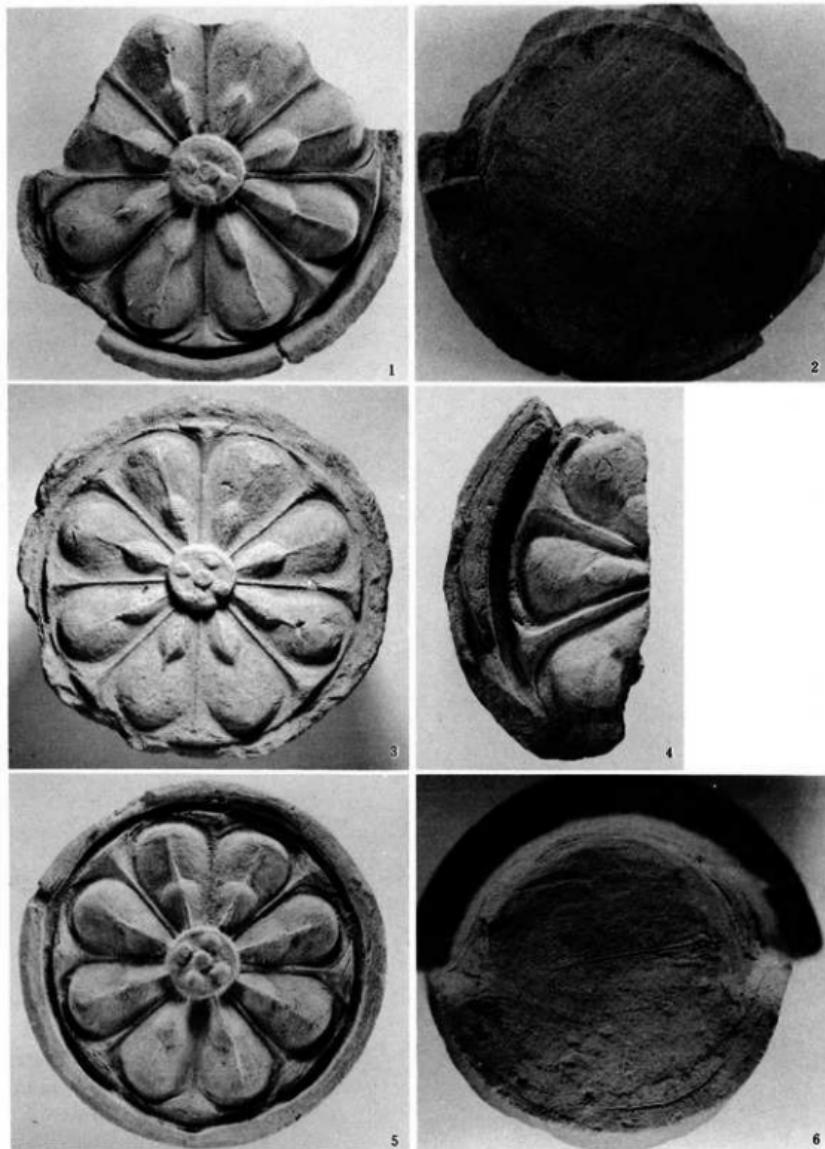
5



6

1. F-51 重弁蓮華文
2. F-63 重弁蓮華文
3. F-52 *
4. F-59 *
5. F-55 *
6. F-19 *

図版27 出土遺物 軒丸瓦



1. F-20 東方蓮華文
2. F-20 西方蓮華文

3. F-3 *

4. F-41 *

5. F-18 *

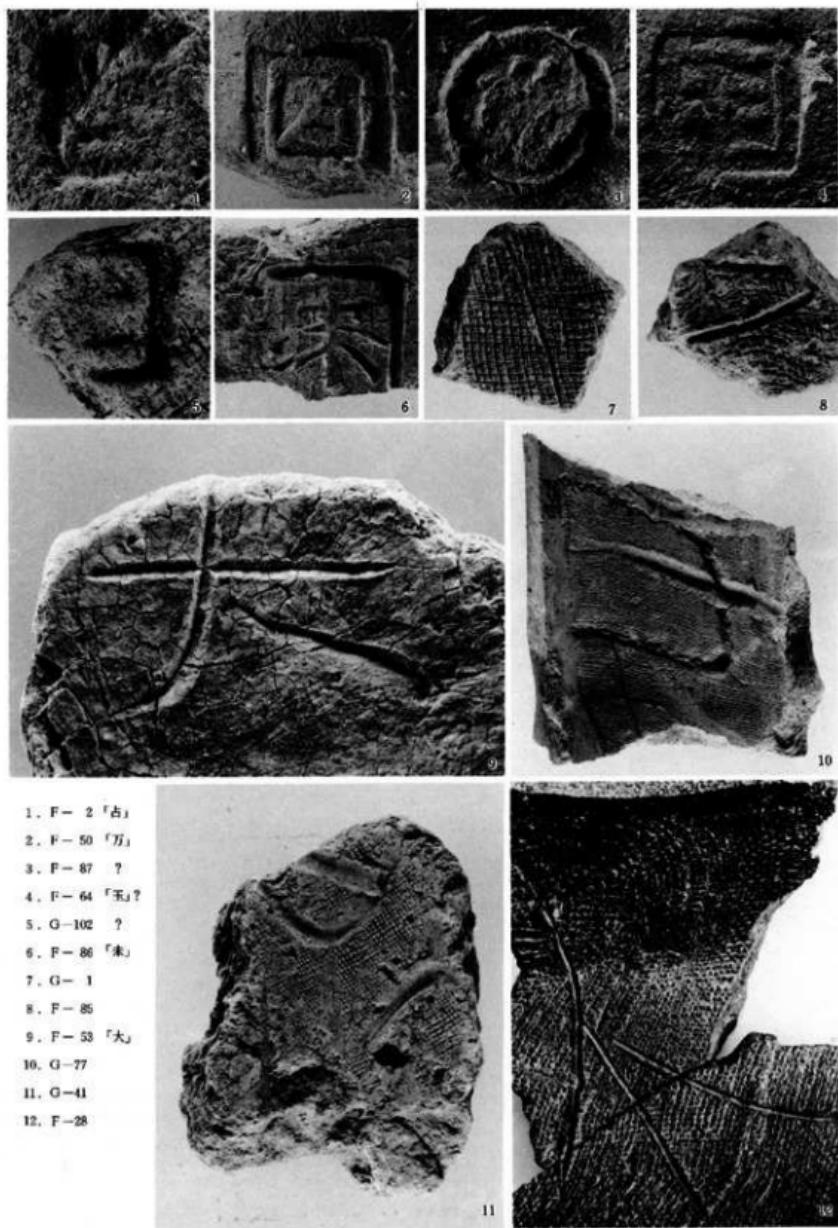
6. F-18 *

圖版28 出土遺物 軒丸瓦

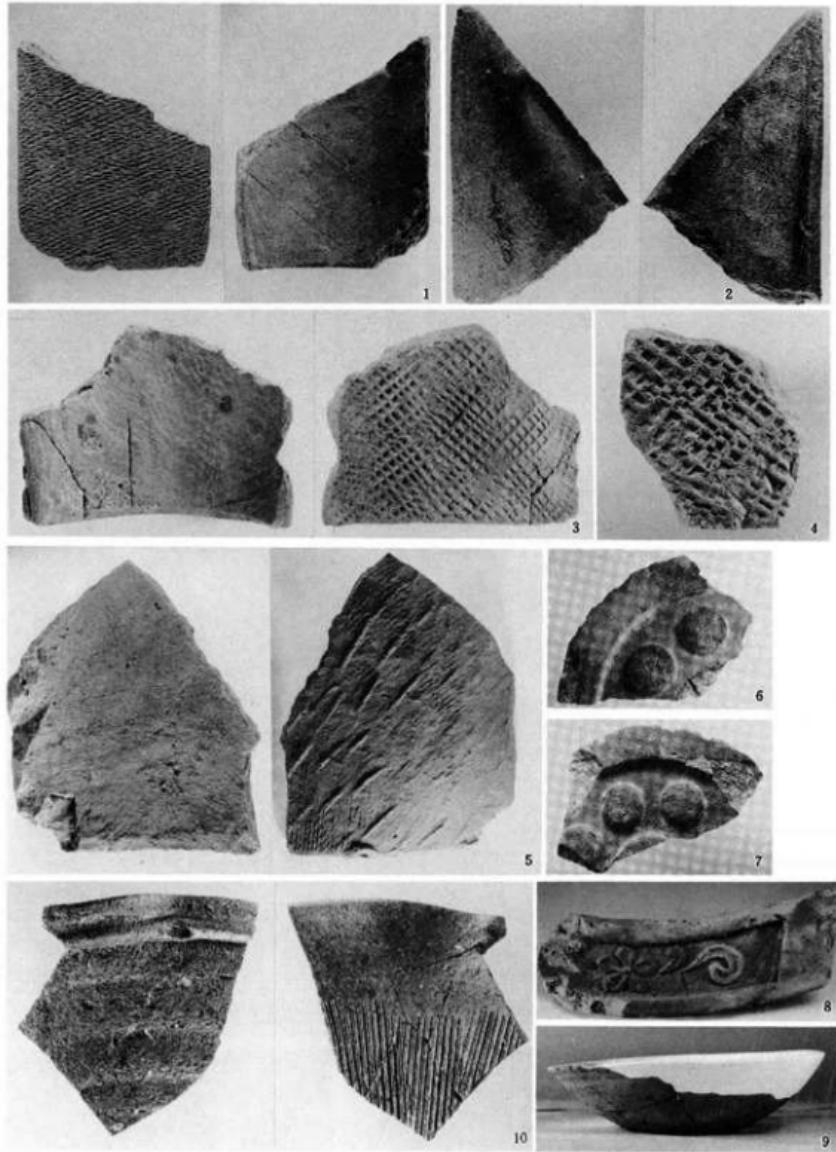


図版29 出土遺物 軒丸瓦

- 1. F-61 宝相華文
- 2. F-62 *
- 3. F-58 *
- 4. F-29 *
- 5. F-27 曲 单 文
- 6. F-73 桐杏葉華文
- 7. F-73 *
- 8. F-60 *
- 9. F-15 櫻花桃文

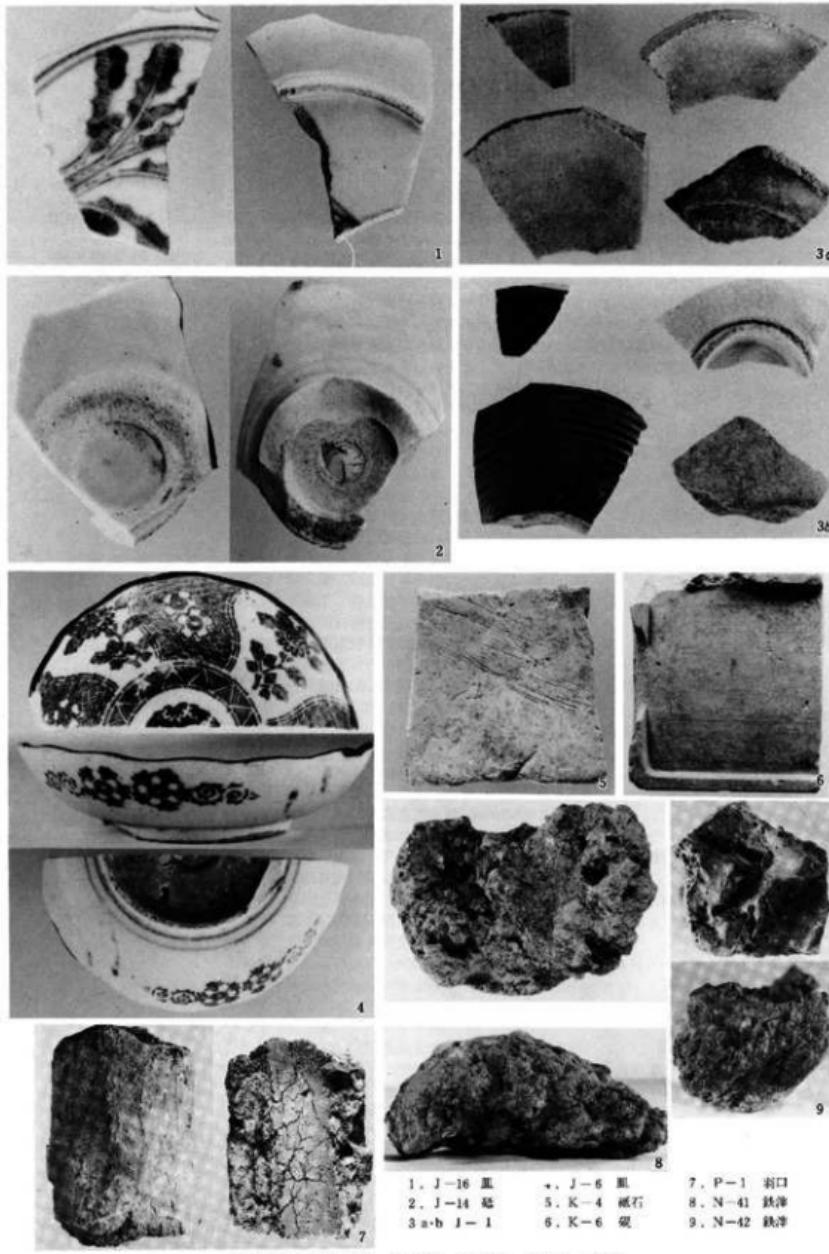


圖版30 出土遺物 文字瓦



1. G-87 懸斗瓦 2. G-43 陽切口瓦 3. G-63 平瓦 4. G-48 平瓦 5. G-92 平瓦
6. F-40 近世瓦 7. F-39 近世瓦 8. G-36 近世瓦 9. D-6 土器環 10. J-13 陶器

圖版31 出土遺物 道具瓦·平瓦·近世瓦



図版32 出土遺物 陶磁器・石製品・土製品・鐵滓

職 員 錄

仙台市文化財調査報告書刊行目録

- 社会教育課
- 課主 長 水野昌一
幹 早坂春一
- 文化財管理係
- 係主 長 大沢隆夫
事 岩澤克輔
山 口 宏
- 文化財調査係
- 係教 良佐藤 隆
論 渡辺忠彦
佐藤裕子
主事 田中剛和
結城慎一
誠 成瀬茂
菅原和夫
青沼一民
柳沢みどり
木村清二
森原信彦
佐藤洋
金森安孝
佐藤甲一
吉岡恭平
工哲司
渡部弘美
教論 渡辺誠
主事 主浜光朗
森野裕彦
長島栄一
荒井裕
派遣員 高橋勝也
- 第1集 天然記念物雲足下セコイア化石林調査報告書（昭和39年4月）
 第2集 仙台城（昭和42年3月）
 第3集 仙台市燕泽善光寺横沢穴古墳群調査報告書（昭和43年3月）
 第4集 史跡奥州国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年3月）
 第5集 仙台市南小泉法師塚古墳調査報告書（昭和47年8月）
 第6集 仙台市荒巻五本松墓地発掘調査報告書（昭和48年10月）
 第7集 仙台市富沢町古墳発掘調査報告書（昭和49年3月）
 第8集 仙台市向山安岩山横穴群発掘調査報告書（昭和49年5月）
 第9集 仙台市根岸町宗祇寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年3月）
 第10集 仙台市中田町久東遺跡発掘調査概報（昭和51年3月）
 史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年3月）
 第11集 史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年3月）
 第12集 史跡遠見塚古墳環境整備第三次予備調査概報（昭和53年3月）
 南小泉遺跡－範開確認調査報告書一（昭和53年3月）
 第14集 南小泉遺跡－範開確認調査報告書二（昭和54年3月）
 第15集 史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報（昭和54年3月）
 第16集 六反田遺跡発掘調査（第2・3次）のあらまし（昭和54年3月）
 北原敷遺跡（昭和54年3月）
 第17集 桥町遺跡発掘調査報告書（昭和55年3月）
 第18集 仙台市地下鉄関係分布調査報告書（昭和55年3月）
 第19集 史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報（昭和55年3月）
 仙台市開闢開闢遺跡調査報告書（昭和55年3月）
 第21集 終ヶ峯（昭和55年3月）
 第22集 第23集 年報1（昭和55年3月）
 第24集 今泉城跡発掘調査報告書（昭和55年8月）
 第25集 三神家遺跡発掘調査報告書（昭和55年12月）
 第26集 史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報（昭和56年3月）
 史跡奥州国分寺跡昭和55年度発掘調査概報（昭和56年3月）
 第27集 年報2（昭和56年3月）
 第28集 郡山遺跡I－昭和55年度発掘調査概報（昭和56年3月）
 第29集 山田上ノ台遺跡発掘調査概報（昭和56年3月）
 第30集 仙台市開闢開闢遺跡調査報告書II（昭和56年3月）
 第31集 鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）
 第32集 山川遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）
 第33集 六反田遺跡発掘調査報告書（昭和56年12月）
 第34集 南小泉遺跡－都市計画街路建設工事関係第1次調査報告（昭和57年3月）
 第35集 北前通り跡発掘調査報告書（昭和57年3月）
 第36集 仙台平野の遺跡群I－昭和56年度発掘調査報告書（昭和57年3月）
 第37集 郡山遺跡II－昭和56年度発掘調査概報（昭和57年3月）
 第38集 茂庭一茂庭住宅所地造成工事地内遺跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
 第39集 茂庭一茂庭住宅所地造成工事地内遺跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
 第40集 仙台市高速鉄道関係道路調査概報I（昭和57年3月）
 第41集 年報3（昭和57年3月）
 第42集 郡山遺跡－宅地造成に伴う緊急発掘調査（昭和57年3月）
 第43集 果実遺跡（昭和57年8月）
 第44集 鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書（昭和57年12月）
 第45集 茂庭一茂庭住宅所地造成工事地内遺跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
 第46集 郡山遺跡II－昭和57年度発掘調査概報（昭和58年3月）
 第47集 仙台平野の遺跡群II－昭和57年度発掘調査報告書（昭和58年3月）
 第48集 史跡遠見塚古墳昭和57年度環境整備予備調査概報（昭和58年3月）
 第49集 仙台市文化財分布調査報告I（昭和58年3月）
 第50集 岩切畠中遺跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
 第51集 仙台市文化財分布地図（昭和58年3月）
 第52集 南小泉遺跡－都市計画街路建設工事関係第2次調査報告（昭和58年3月）

- 第53集 中山畑中遺跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
第54集 神明社塗跡発掘調査報告書（昭和58年3月）
第55集 南小泉遺跡－青葉女子学園移転新営工事地内調査報告（昭和58年3月）
第56集 仙台市高連鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ（昭和58年3月）
第57集 年報4（昭和58年3月）
第58集 今泉城跡（昭和58年3月）
第59集 下ノ内浦遺跡（昭和58年3月）
第60集 南小泉遺跡－倉庫建業に伴う緊急発掘調査報告書一（昭和58年3月）
第61集 山口遺跡発掘調査報告書（昭和59年3月）
第62集 燐沢遺跡（昭和59年3月）
第63集 史跡陸奥国分寺跡－昭和58年度環境整備予備調査概報一（昭和59年3月）
第64集 郡山遺跡Ⅳ－昭和58年度発掘調査概報一（昭和59年3月）
第65集 仙台平野の遺跡群Ⅰ－昭和58年度発掘調査報告書一（昭和59年3月）

仙台市文化財調査報告書第63集

昭和58年度

史跡陸奥国分寺跡

昭和58年度環境整備予備調査概報

昭和59年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市国分町3-7-1

仙台市教育委員会社会教育課

印刷 (株) 東北プリント

仙台市立町24-24 TEL 63-1166
